博　士　論　文

副詞「よく」の多義性

平成 28 年 3 月

中央大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程後期課程
李佳娟（イ　カヨン）

副詞「よく」の多義性

中央大学大学院文学研究科
李佳娟（イ　カヨン）

目　次

第1章　序論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*5*

1.　研究の目的　　*6*

2.　先行研究　　*7*

2.1　「よく」に関する先行研究　　*7*

2.2　多義的副詞に関する先行研究　　*10*

3.　研究方法　　*11*

4.　本論文の構成　　*12*

第2章　副詞「よく」の用法の分類　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*16*

1.　本章の目的　　*17*

2.　「よく」の用法　　*17*

3.　二つのテスト　　*18*

3.1　文副詞か部分副詞か　　*18*

3.2　典型的な副詞との置き換えが可能か　　*19*

4.　資料分析　　*21*

第3章　評価表示の「よく」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*23*

1.　本章の目的　　*24*

2.　先行研究と研究方法　　*24*

3.　資料分析　　*25*

4.　評価表示の「よく」の文の特徴　　*26*

4.1　文中での位置　　*27*

4.2　後続語の有無　　*29*

4.3　授受表現との関係　　*31*

4.4　可能表現との関係　　*33*

4.5　打消しとの関係　　*34*

4.6　まとめ　　*35*

5.　意味による分類　　*36*

5.1　肯定的な評価　　*36*

5.2　否定的な評価　*39*
6.　意味の仕組み　*40*
6.1　「よく」と「まさか」の比較　*42*
6.2　まとめ　*44*

第4章　情態表示の「よく」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*45*
1.　本章の目的　*46*
2.　先行研究と研究方法　*46*
3.　資料分析　*47*
4.　意味による分類とその特徴　*47*
5.　まとめ　*51*

第5章　程度表示の「よく」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*53*
1.　本章の目的　*54*
2.　先行研究及び程度性の規定　*54*
3.　研究方法と資料分析　*54*
4.　程度表示の「よく」の特徴　*55*
5.　まとめ　*60*

第6章　頻度表示の「よく」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・*61*
1.　本章の目的　*62*
2.　先行研究と研究方法　*62*
3.　資料分析　*64*
3.1　文体の確認　*64*
3.2　入れ替え可否の確認　*65*
3.3　「ものだ」との呼応　*69*
3.4　まとめ　*70*
4.　「よく」と「しばしば」の比較　*71*
4.1　「よく」文の特徴　*71*
4.2　「しばしば」文の特徴　*74*
4.3　「よく」と「しばしば」の意味の構成要素と事柄の現れ方　*76*
4.4　まとめ　*81*

第7章　副詞「よく」の意味構造　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
1.　本章の目的　　83
2.　「よく」の〈評価性〉　　83
2.1　評価表示の「よく」の〈評価性〉　　83
2.2　情態表示の「よく」の〈評価性〉　　84
2.3　程度表示の「よく」の〈評価性〉　　85
2.4　頻度表示の「よく」の〈評価性〉　　86
3.　「よく」の意味構造　　87
4.　まとめ　　89
5.　本論文の成果と課題　　90

参考文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
資料　・・95
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

第1章　序　論

1.　研究の目的

本研究は副詞「よく」の多義性を解明するものである。多義語とは、國廣(1982)によれば、次の通りである。

「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。

一つの語形にいくつかの意味があるというのは理解できるが、その意味同士の間に、関連性があるものなのか、ないものか、判然としない。「よく行く店」と「よく来たね」は、意味が異なるが、これは一つの語形に、異なる二つの意味が結びついているのか、一つの語形の一つの意味が二つの異なる用法として実現しているのか。國廣(1986)は以下の二点を挙げ、多義語の語義研究の難しさについて指摘している。

・意味がどの程度違えば多義的な別義と認めるかについての基準がはっきりしない。
・二義の間の意味の距りがだんだん大きくなって行く場合、どの程度の距りまでを多義的と見るかという基準が定めにくい。

「よく」以外にも日本語には「もう」、「ちょっと」、「どうも」など多義語でありながら、その複数の意味の間に関連性を見つけにくい副詞が多くある。ところが、先行研究の中には藤原(2005)のように、限定的な意義素が多義を生むと説明するものがある。

「よく」に関する先行研究を調べてみると、「よく」にいろいろな意味があることについては述べられていたが、それらの間に何らかの関連があるという研究はなかった。それでは、「よく」の多義性は、通時的に生じてきた独立した意味なのだろうか。

本稿では通時的な観点は持たないが、「よく」は基本的に形容詞「よい」の連用形であり、述語をかざる成分に転じたものである。すなわち一つの副詞である。そしていずれの用法も動詞述語にかかる。各用法の「よく」が、支配する文法カテゴリーが異なるとすると、その意味の違いは文法カテゴリーのあり方に由来するものであり、「よく」自体の意味は何らかの関連を持っていると考える方が自然である。そのように出発すると、従来の多義併存型のモデルとは異なるモデルを想定することができる。そのため、本研究では「よく」のそれぞれの用法について、意味分析をおこなったのち、各用法がお互いどのような関連を持って結び付いているのかに関して理論的なモデルを構築することを目的とする。

2.　先行研究

ここでは、これまでの研究を取り上げ、「よく」に関する先行研究を検討し、意味記述を確認し、問題点や再考すべき点を考える。また、日本語の中に多く存在する多義的副詞に関する研究を取り上げる。

2.1　「よく」に関する先行研究

「よく」を主たる研究対象とする研究論文、また、多義について意味記述を行っている書籍を取り上げ、その内容を要約し、論点や主張に関して記する。「よく」に関する研究は辞書類と研究論文などがあるが、基礎語であることから、全ての辞書類に掲載されている。本稿では「よく」に関してより具体的に記述しているいくつかの辞書類と研究論文を挙げ、研究状況をまとめておく。まず辞書類の中からは、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、グループ・ジャマシイ(1998)、日本国語大辞典第二版(2002)の四点をとりあげ、以下に要点をまとめる。

一点目の森田(1989)は「満足を得るような望ましい状態に対象のあることが「よい」であるが、そのような状態判断を行為や作用のあり方に転用することにより、「よい」の副詞的用法が生まれる」とし、具体的な用法に関しては次のように説明している。

分析①困難な事柄を遂行したことに対する評価

⑴　肯定的な評価の場合

⑵　否定的な評価の場合

分析②行為・作用のおこなわれ方の説明

⑴　行為・作用の完全さを表す場合

⑵　行為・作用の頻繁さを表す場合

森田(1989)の記述からは「よく」という語自体の意味や用法は単純である。そして通常の副詞分類に当てはめると、分析①の⑴と⑵は評価副詞あるいはモダリティ副詞的な用法であり、分析②の⑴は程度副詞、②の⑵は頻度副詞的な用法であるとみられ、「よく」に少なくとも三つの用法があると理解できる。また分析②の⑴では、分析①の「行為を遂行することへの評価」が、「行為そのものの評価へと移行する」とし、分析②の⑵では「十分に行うことは、その時の行為の完全さとともに、同じ行為を繰り返し何度もおこなう頻繁さともなる」と述べ、各用法が関連を以てお互い絡み合っていることについて説明している。

二点目に飛田・浅田(1994)の要点を以下にまとめる。

⑴　望ましく好ましい様子を表す。

⑵　相手の困難な行為を評価したり賞賛したりする様子を表す。

⑶　⑵の反語の用法、相手の行為に疑問をもったり憤慨したりする様子を表す。

⑷　行為の状態の程度が十分である様子を表す。

⑸　頻度が高い様子を表す。

⑹　完全に達成する様子を表す。

飛田・浅田(1994)は「よく」に関して六つの用法に分類して詳細に述べている。そのうち、⑵と⑶は評価副詞的な用法、⑷は程度副詞的な用法、⑸は頻度副詞的な用法、⑹は「かたい文章語で日常会話には登場しない」とし、例外的な用法であるとみられる。しかし、⑴については「さまざまの状態について好ましいことを表す」とし、「帰省するといつも兄嫁によくしてもらっている」のような、本稿では形容詞「良い」の連用形と分類した用例を挙げ説明しているため、「よく」を副詞的に考える人にはやや紛らわしく思われるのではないかとみられる。また、全ての用法に関して「述語にかかる修飾語として用いられる」、⑸については「動詞にかかる修飾語として用いられる」としているが、一見評価副詞すなわちモダリティ副詞的にみられる⑵と⑶の場合、「よく」がただ述語のみにかかるものなのかについては、疑問が残る。そして以上の説明では、六つの用法の間に國廣(1982)のいう「意味的に何らかの関連」というのがどこにあるのかわかりにくい。

三点目にグループ・ジャマシイ(1998)の要点を以下にまとめる。

⑴　〈頻度〉：頻度が多いことを表す。

⑵　〈程度〉：程度が十分であることを表す。困難なことを満足にやり遂げた努力をほめるのに用いることもある。

⑶　よく(ぞ)〈感激〉：大変なことを私のためにわざわざやってくれてうれしいという感激の気持ちを表す。

⑷　よく(も)〈驚き〉：困難なことをやったり起こりそうもないことが起こったりしたことに対する驚きを表す。

⑸　よく(も)〈非難〉：迷惑なことやひどいこと、非常識なことなどをすることに対して怒りや非難、あきれ、軽蔑の気持ちを表す。

グループ・ジャマシイ(1998)は「よく」を五つの用法に分けて説明している。しかし、⑶～⑸を評価副詞的な用法とまとめ、⑴を頻度副詞的な用法、⑵を程度副詞的な用法とみると、

「よく」に大きく三つの用法があるということができる。文型辞典であるだけにどのような文型に用いられるかに焦点が置かれており、普通肯定的な評価としたものを感激と驚きに分けて説明しているのが特徴的である。しかし、グループジャマシイ(1998)の記述からも五つの用法の間に「意味的に何らかの関連」は見出しにくい。

最後に四点目の日本国語大辞典第二版(2002)の記述をまとめる。

⑴　十分に。念を入れて。巧みに。うまく。
⑵　ひどく。非常に。はなはだしく。大変。
⑶　たびたび。ともすれば。しばしば。ちょくちょく。まま。
⑷　困難なことをなしとげた時、あたりまえでは考えられないような結果を得た時、喜ばしいことにでくわした時などの感嘆・賞賛・喜悦あるいは羨望の気持を表す。
⑸　(⑷を否定的な意味でいう)常識では考えられないような行為や言説が行われた時、それに対して非難・軽蔑・憎悪などの気持を表す。恥ずかしくもなくまあ。

⑷と⑸を通常の評価副詞的な用法とまとめると、大きく四つの用法があると考えられる。特徴的なのは、⑴と⑵に十分さとはなはだしさを取り上げていることで、⑵を程度副詞的な用法、⑶を頻度副詞的な用法、⑷と⑸を評価副詞的な用法と考えると、それ以外の用法があることを認めている。が、残念ながら挙げている用例がすべて古典資料からの引用であるため、現代日本語にそのまま当てはまるかについては検討が要される。ただし、この記述を見る限り、伝統的には「よく」の用法に十分さとはなはだしさが分けられていて、頻度副詞的な用法と評価副詞的な用法以外に少なくとも二つの用法があるのではないかという推測が可能である。

以上、四点による辞書類の記述から言えることは、「よく」に頻度・程度・評価といった少なくとも三つの用法を認めているということである。各用法間の関係については森田(1989)が少し触れている程度で、「よく」の多義を成している意味的な関連についてはわかりにくい。

「よく」に関する研究論文としては、近藤(1986)、森本(1991)などが挙げられる。まず近藤(1986)は、「「よく」には主に頻度、程度、ムードの三つの用法がある」とし、それぞれの特徴について、「頻度の「よく」は、「事象の回数の多さ」を表すが、そこから文全体が状態説明(属性表現)となるような用法へずれることもある」と述べており、「程度の「よく」は状態性動詞と共起する場合は、動詞が語義として持つ状態性に対する程度の規定をし、(中略)、動作性動詞と共起する場合は主に「所要時間の長さ」「注意深さ」「極限状態への

接近度」の意味を規定する」としている。またムードの「よく」は「後続する動詞を規定するというより動詞を含む事柄全体に対する話し手の心的態度を表すもの」とし、「発話時点における、話し手の心的態度を表している点で、ムード的」用法であると説明している。近藤(1986)は「よく」に三つの用法があることとそれぞれの特徴が明確である。本研究での各用法の考察は近藤(1986)を発展していく形になる。ただし、ここでも三つの用法の間の相関関係に関しては言及していないため、「よく」の多義を形成する基本的かつ共通の意味とは何かに関して考える必要がある。

次に森本(1992)は、副詞的機能をもつ「よく」のさまざまな用法を検討しつつ、機能的なスコープによって、「よく」には動詞だけをスコープとしてとるもの、動詞句をスコープとするもの、文全体がスコープとなるものといった三種類の機能があるとし、それぞれの特徴を明らかにしている。そして「よく」のモダリティ制限、特に意志のモダリティとの関係について、「「よく」は文末の意志のモダリティについて制限を受けることが多い」と明らかにしたうえで、その理由について「「よく」の基本的意味を評価性と考えると、批評すべきことは前提とされていなければならないという条件から生じる制限だ」と述べ、「よく」自体の意味的特徴や意志のモダリティとの関係に関して説明している。このように森本(1992)は、「よく」の基本的意味を提示し、それが「よく」のモダリティ制限に影響を及ぼしているというように述べている点で、他の研究とは区別される。

本研究では、森本(1992)を踏まえ「よく」の基本的意味を評価と考え、評価を表す用法から研究を進めるが、その評価が、文の中で具体的にどのように発現されており、各用法とどのように関係づけられているのかに関して明らかにし、その本質を明確に示していく。また、以上の先行研究から共通にわかる「よく」の三つの用法に関して確認し、各用法に関する先行研究を発展させ、「よく」の多様な意味がなぜ生じ、意味同士の間の関連性は何かについて、より詳しく検討する。

2.2　多義的副詞に関する先行研究

多義的副詞に関する研究はいろいろあるが、本稿では藤原(2005)の「副詞「ちょっと」の意味構造」を取り上げ、分析方法を参照する。

藤原(2005)は多義的副詞「ちょっと」に関して、「「ちょっと」自体が複数の意義素をもっており、その意義素が場面に応じて組み合わされることで、多義性・多機能性が生み出される」と考え、「ちょっと」は「〈確実性〉と〈基準の近接性〉の二つの意義素を有」し、「談話レベル・心理レベル・物理レベルと、その対象がかわることによって、表示される機能が異なる。そして、二項目が論理を形成することによって、実現される意味が異なる。こ

の結果、「ちょっと」には多義性と多機能性が見られることになる」と述べ、限定的な意義素とその場面での組み合わせが多義を生むと説明している。

「よく」が意味的関連性をもつ多義語であると考えると、「ちょっと」のように限定的な意義素(意味の構成要素)をもつと予想される。またそれは各意味同士の共通性と深く関係していると思われる。本稿では「よく」の意味の構成要素を探り出し、それらが「よく」の多様な意味とどのように関わり合い、どのように多義を作り出すのか具体的に提示したい。

3. 研究方法

研究の対象は多義的副詞「よく」である。通常、形容詞の連用形は「早く走る」のように、用言を修飾する副詞的な役割をするが、「よく」のように文法化が進み、ほぼ副詞のように定着してきているものは非常に珍しい。さらに、副詞全体で位置づけた場合、文副詞的にも、また程度副詞的にも働き、多機能的である。このように、「よく」は普通の副詞とは異なる独自的な副詞として位置付けられていると判断される。

研究方法は基本的に意味分類をし、それを検査する方法をとる。具体的には「よく」の用例を収集し、それらをいくつかの用法に分類した後、それぞれの用法に関して構文的、意味的特徴を明らかにしたうえで、それらの関連性について解明していくことである。

まず研究の第一段階である用例収集は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』(BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) を利用し、検索対象は出版・書籍(コア)、ジャンルは9文学、出版年は1970年代から2000年代のうち、2000年代(2000年～2008年)に限定し検索を行った。検索結果からさらに外国人作家の作品を翻訳したものや古典の現代語訳作品、また形容詞「よい」の連用形[1](「体がよくなった」や「仲よくしている」、「勢いよく」など)と、 言いさし文(それはよく…)を除き用例を収集した[2]。

得られた用例は「よく」の用法に関する従来の研究に基づき、典型的な副詞との入れ替え

---

[1] 形容詞の連用形と副詞的用法の区別は飯豊(1973)に従う。飯豊(1973)の「副詞的修飾語を詳しく見ると、「桜花美しく咲く」、「名残惜しく思ふ」とでは作用が少し異なることに気づく。「美しく咲く」の「美しく」は確かに「咲く」を修飾限定しているのであるが、「名残惜しく思ふ」の場合は「名残惜しい」と思うのであり、「名残惜しく」は「思ふ」の内容である。(中略)必ずしも明確に区別できるわけではないが、「見る、聞く、思ふ、す、なる」などに連なる場合には単なる修飾ではなく、その内容・対象を示すことが多い」という記述に基づき、本稿では「体がよくなった」のように、「よく」がその内容や対象を示す場合は「よい」の連用形扱いをした。

[2] ただし、用例収集に用いた資料が書き言葉であり、会話文であっても日常会話とは異なるため、必要によって話し言葉に近いとみられるツイッター(twitter)の書き込みをツイナビ(http://twinavi.jp/)を利用して参考、確認した。

テストから三つの用法に分類したが、その段階の中で分類しきれないものがあったため、「よく」の用法分類再考の必要があると判断し、新たな用法分類を試みた。そのプロセスを経て新しく分類された「よく」の用法に関して考察を行った。各用法は先行研究を踏まえつつ、文の中での意味に従い、従来の三用法以外の用法があることを提示する。

評価表示の「よく」に関しては「よく」と共起しやすいいくつかの要素を取り上げ、文の特徴を明らかにした後、文のしくみを考察することにより、意味的にどのような特徴を持っているのかに関して検討する。その過程の中で意味的共通性がみられる「まさか」との比較研究を行い、「よく」ならではの特徴を明らかにする。

次に情態表示の「よく」に関しては、具体的な意味によっていくつかの類型に分類し、それぞれの特徴について検討を行う。

また程度表示の「よく」に関しては、典型的な程度副詞とされる「非常に」との比較研究を試み、「非常に」とは違う「よく」固有の特徴に関して明らかにするほか、情態表示の用法との関係についても検討する。

最後に頻度表示の「よく」に関しては、類義関係にあると思われる「しばしば」を研究対象とし比較研究を行い、二語の共通点や相違点について明らかにした後、また、「しばしば」とは区別される「よく」ならではの特徴について明確にする。その後、各用法の考察結果から明らかになった特徴をもとに「よく」の多義性を生み出す要因について検討し、「よく」の意味構造を構築していく。

4.　本論文の構成

本稿は全７章の構成からなっている。構成内容は第１章が、研究内容の概観として、研究の目的、研究対象、研究方法などを提示した。本研究の対象は多義の副詞「よく」であり、それの多義性に関して取り上げるもので、各用法の意味分析を通してそれらがどのような関連を持って結び付いているのかについて理論的なモデルを構築することを目的とし研究を進めた。研究方法は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』（BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese）を利用し収集した用例をもとに意味分類をし、それを検査する方法を実施した。また、先行研究を取り上げ研究状況を示したが、まず「よく」に関する研究について、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、グループジャマシイ(1998)、日本国語大辞典第二版(2002)、近藤(1986)、森本(1991)を挙げ、「よく」に少なくとも三つの用法があること、しかし各用法の意味的関連性を説明するものがないことなどを確認した。そして、多義的副詞に関する先行研究は藤原(2005)を取り上げ、限定的な意義素とその場面での組み合わせが多義を生むという記述から方法論的に参考して研究を進めた。

次に第２章においては、用例を「よく」の各用法に分類するため、二つのテストを行った。一つ目のテストは文副詞か部分副詞かを分けるためのものである。「よく」が修飾する範囲が文全体か、述語だけかによって文副詞と部分副詞とに分け、文副詞の方を評価表示の用法とした。二つ目のテストは典型的な副詞との置き換えが可能かを確認するもので、まず「しばしば」とのテストから頻度表示の用法を分類し、残りに対して「非常に」とのテストを行い、置き換え可能の方を程度表示の用法とし、不可能の方を情態表示の用法とした。各用法は全2041例のうちそれぞれ493、155、260、1133例という結果となったが、用例数の多い用法は表現の多様性に乏しく、「よく」の代表的用法と考えにくい。そのため、用例数ではなく、意味を中心に評価表示の用法から研究を行った。

第３章は「よく」の各用法を取り上げる各論の第一として、評価表示の用法に関するもので、李佳娟(2013)「副詞「よく」の評価表示の意味論的考察」が初出論文である。まず評価表示の用例を会話文と地の文という文体の観点から分類した結果、会話文の方に圧倒的に多く使われていた。次に文の特徴について、「よく」の文中での位置、後続語、授受表現、可能表現、打消しマーカーとの共起関係を中心に考察したところ、評価表示の「よく」は文頭に来やすく、後続語を伴うことが可能であり、授受表現・可能表現との共起率がかなり高く、打消しとはほとんど共起しないことが明らかになった。また、意味による分類を試みたところ、大きく肯定的評価と否定的評価とがあり、文の中で賞賛、歓迎、驚嘆、非難といった具体的な意味を表していることがわかった。その一方で、いずれも同じ文のしくみをもっていて、予想外の事態が実現した時の話し手の評価を表していることが明らかになった。さらに予想外という特徴を持っている「まさか」との比較研究を試みたが、その結果、「よく」と「まさか」は話者が実現可能性を念頭に入れているか否かの相違があることが明らかになり、二語の表す予想外というのはその特徴を異にしていることを示した。要するに、評価表示の「よく」の意味の構成要素は〈評価性〉であって、具体的に言えば〈話者の予測を基準とした予想外の事態とそれに対する話者の(通常肯定的)評価〉である。

次に第４章は情態表示の用法に関するもので、李佳娟(2012b)「副詞「よく」の程度表示の意味論的考察[3]」が初出論文である。情態表示の用例は基本的に事態のあり方を表し、充実性、確実性、十分性といった具体的な意味を表していた。それぞれ結果状態を表す形式と共起しやすい、依頼・命令の形式との共起が際立つ、否定の形式と共起しやすいという特徴を持っていた。また、その一方、共通した特徴として、状態の変化を有する述語を対象に程度的に捉え、それが〈評価性〉をもつことが明らかになった。情態表示の用法は従来の研究

[3] 李佳娟(2012b)には情態表示用法と程度表示用法の両方が含まれているが、この博士論文にまとめるにあたって、書き改め、情態表示用法は第４章に、程度表示の用法は第５章に分けて論述した。

で程度的な用法との区別があまりなされていなかったが、考察を通し、程度表示の用法とは異なる、それなりの特徴を持っていることが明らかになった。

また第 5 章は、程度表示の用法に関するもので、典型的な程度副詞である「非常に」との置き換えが可能な用例を対象に検討を行い、まずアスペクトの観点から状態変化の結果相と単なる状態を表すものとに分けることができ、状態の程度が高いという意味を〈程度性〉と規定した。ところが情態表示の用法からわかる程度的捉え方と程度表示の〈程度性〉とは変化の度合いを問うか、度合いの高さを問うかという点で相違がみられる。そして程度表示の「よく」は、基本的に状態性動詞にかかってその程度の高さを取り立てるものである。ただし、単に程度の高さのみを表すのではなく、状態変化の結果相、また結果継続の状態の特徴をもつ述語と、その度合いが最大値に近いこととの組み合わせが〈評価性〉をもつ。そしてそれは、結果を取り立てる副詞となり、程度表示の「よく」の意味特徴である〈程度性〉が表れることが明らかになった。

次に第 6 章は各論の最後である頻度表示の用法に関するもので、李佳娟(2012a)「副詞「よく」の頻度表示の意味論的考察 - 「しばしば」との比較から - 」が初出論文である。頻度表示の「よく」を典型的な頻度副詞である「しばしば」と、文体・入れ替えテスト・「ものだ」との呼応という観点から比較研究を行った。その結果、「しばしば」が文章語的であるのに対し、「よく」は文章語・口語を問わず、自由に使われることが明らかになった。そして「しばしば」が「いちばん」の修飾を受けられないのに対し、「よく」は修飾を受ける副詞の制限がなかった。最後に「ものだ」との共起率を調べた結果、「しばしば」に比べ「よく」の方が「ものだ」と若干共起しやすい結果となった。「よく」と「しばしば」は回数が多いという点で同様の意味の構成要素をもつと言え、置き換え可能であるが、「しばしば」には、時間枠があり、「よく」は時間枠が必須ではない。そのかわりに、事柄が累積し、これが〈評価性〉をもつ。つまり、頻度表示の「よく」は、「しばしば」にはない反復動作が累積するという特徴を持っていて、反復継続の動詞述語とそれの累積把握との組み合わせが〈評価性〉を有し、頻度表示の「よく」の意味特徴である〈頻度性〉を構成するのである。

最後に第 7 章は各論の内容をまとめ直し、「よく」の意味構造を明らかにする章で、李佳娟(2015)「副詞「よく」の意味構造」が初出論文である。以上の考察から「よく」の意味の構成要素は〈評価性〉であることが明らかになった。まず評価表示の用法の〈評価性〉は、動詞文を対象として、話者の予測を基準に、期待される事態の実現に対する話者の肯定的評価である。情態表示の用法は、話し手と聞き手の共有した情報を基準に、状態変化の述語を対象とした、話者の程度的捉え方である。程度表示の用法は話し手と聞き手が共有した情報を基準に、状態変化の結果相と結果継続の状態の述語を対象として、最大値に近いという話

者の判断であり、頻度表示の「よく」は、話者の記憶を基準に、反復継続の述語を対象とした、累積把握による話者の判断であることが確認された。結論として「よく」の多義性は〈評価性〉という意味の構成要素が文法的機能の分岐によって現れる現象であることが明らかになった。

第2章　副詞「よく」の用法の分類

1.　本章の目的

「よく」の先行研究においては、頻度と程度、評価表示という三用法が示される。本稿ではそれに従い、いくつかのテストを通して従来の研究に示されている「よく」の用法に関して確認していく。方法としては次の三点に着目する。

一点目に、「よく」が限定する部分を基準に、文副詞として働くか部分副詞として働くかを分ける。

二点目に、第一のプロセスを経て分けられたものに対し、典型的な副詞との置き換えが可能かどうか確認し、更なる分類を行う。

三点目に、上記の二点から分類された用法に基づいて各用例数を提示し、その特徴を検討する。

この三つの観点から、「よく」の分類を確認し、従来の分類において補足できるような部分はないのか、さらに新たな分類の必要性について等を考察する。

なお、検討材料は、第 1 章 2 に記した資料から採取した「よく」の用例 2041 例である。

2.　「よく」の用法

副詞「よく」は以下の用例のように、多義的である。

1)　父さんはぼくをよくドライブに誘った。(永瀬隼介(2005)『わたしが愛した愚か者』)

2)　早朝からよく晴れて峠に出たあたりでは夏を思わせる気温になった。(平岩弓枝(2001)『はやぶさ新八御用旅』)

3)　この記録をもう一度よく見てください。(御堂地章(2005)『日本崩壊』)

4)　ここ数日留守にしていた兵悟の代わりに翠がいたせいなのか、よく片づけられている。(響野夏菜(2001)『東京 S 黄尾探偵団』)

5)　また建物の中に入り、廊下を曲がったところで、よく知っている匂いを鼻に感じた。(柴田よしき(2005)『透明な貴婦人の謎』)

6)　ところで失礼ながら、君はそんなに細い体で、よくここまで走ってきたものだな。(斎藤純(2004)『銀輪の覇者』)

1)は従来の研究に記述されている頻度を表すものである。また、6)は他の用例とは多少異なっていて相手に対する評価を表すものであるとすぐ判断できる。それに対し、2)～5)の用例は程度的用法に入るもので、同じような特徴を持っているはずであるが、一つの用法として、同じ意味であるとは言い切れない。いずれも述語の表す様子がどれくらいできているの

かに関する、その度合いに言及するものであるとは見られるが、単にそれだけではなく、2)はどのように晴れているのかといった、空の晴れ具合に関して言及しており、3)は見方をより綿密にしてくれるよう促している。また、4)は片づけられている様子が見事であることを、5)は対象について詳しく知っているということを含意している。次の節では「よく」の用法に関して再考してみることにする。

3. 二つのテスト

「よく」には、頻度・程度・評価表示の三つの用法があることが知られている。本節では二つのテスト、すなわち、(1)文副詞か部分副詞か(3.1 参照)、(2)典型的な副詞との置き換えが可能か(3.2 参照)を行い、「よく」の用例が全て三つの用法に分けられるかを確認する。

3.1 文副詞か部分副詞か

一つ目のテストは「よく」の限定を受ける部分が、文であるか文の一部であるかということである。次の用例から、確認してみよう。

7) 私、昔から絵が好きでここにはよく来ます。(春樹陽介(2003)『ハートフルラウンジ』)
8) 今君の気持はよくわかった。(丹羽文雄(2004)『友を偲ぶ』)
9) それなのに、よく、三つの部屋を買う金があったな。もともと、金持ちの家に生れたのかね？(西村京太郎(2001)『闇を引き継ぐ者』)

7)、8)は「よく」が文の中で「来ます」と「わかった」のみを修飾しており、頻度と程度表示の用法は文の中で述語のみを修飾する部分副詞である。これに対して、9)は「三つの部屋を買う金があった」ことに対する驚きといった、一種の評価を表しており、「よく」以下の文全体を導く。そして、文副詞と判断したものは命題に対する話者の評価を表す。すなわち、評価表示の用法は文全体を導く文副詞[4]であるといえる[5]。

[4] 中右(1980)では、従来「陳述副詞」や「誘導副詞」など言われてきたものを、一般に「文副詞」と呼ばれる副詞として取り上げ、文の命題の外側にくる要素であり、命題とかかわり具合の違いから四つ(価値判断の副詞、真偽判断の副詞、発話行為の副詞、領域指定の副詞)に下位分類している。本研究では、用例 9)のような類が文全体を修飾する副詞であることから文副詞に当たるものとし、それ以外は命題内副詞として文の一部である述語を修飾することに着目し部分副詞と規定する。
[5] 用例の中には「よくきたな」、「よくいってくれた」のように、述語のみを修飾するするように見えるものも存在するが、「よく」が含まれている文全体にその影響が及ぶと判断し文副詞扱いをした。

用例収集を通して採取した全 2041 例のうち、9)のように文副詞として働くものは 260 例あり、これを本稿では「よく」の評価表示の用法とする。

3.2　典型的な副詞との置き換えが可能か

3.1 で部分副詞と分類された用例は、従来の研究に照らしてみると、頻度表示の用法か、あるいは程度表示の用法かどちらかに二分されなければならない。まず、それを確認する。採取した全 2041 例から文副詞である 260 例を引いた、部分副詞の用例 1781 例に対して、「よく」の類義語でありながら、典型的な頻度の副詞である「しばしば」との置き換えテストを行った[6]。 置き換えても文意が変わらなければ頻度表示であり、それ以外は程度表示であるはずである。

10)　先輩にこんな趣味があったとはちょっと驚きです。よく/しばしば(◯)来るんですか？(春樹陽介(2003)『ハートフルラウンジ』)

11)　その剛毅で誠実な性格は、長年同じ戦線で暮して来ただけによく/しばしば(？)認識している。(山田風太郎(2003)『妖説太閤記』)

10)は「しばしば」との置き換えが可能な用例であり、11)は不可能な用例である[7]。10)のような置き換え可能な例は 1781 例のうち 493 例[8]あり、これらを本稿では「よく」の頻度表示の用法と規定する。

以上、部分副詞の中で頻度表示の用例を分類したため、残ったものは全て程度表示の用例であるはずである。本当にそうであるのかを確認するために、頻度表示の用法 493 例を除いた残りの 1288 例に対して、程度表示の「よく」と類義関係にあり、典型的な程度副詞である「非常に」との置き換えテストを行った。

12)　顔かたちも、ルトヴィア人の母の血を色濃く継いだシャイハンとは違い、父によく/非常に(◯)似ていた。(須賀しのぶ(2002)『砂の覇王』)

[6] 置き換え文の非文可否の確認はグーグル(www.google.com)を利用し、「副詞＋動詞」の形で検索して実際に使われている表現であるか確認した。

[7] 用例の中には「しばしば」を入れると、「もう一つは、桑柘の枝に烏が止まると、枝がよく/しばしば(◯)たわむために飛び立つことができず、烏が号呼する。(中島敦(2003)『山月記・李陵』)」のように、文法的には何の問題もない文であるが、もともとの文の意味が頻度の意味に変わってしまうことにより、置き換え不可との扱いをしたものもある。

[8] 493 例の中には「しばしば」を入れると、頻度の意味は変わらないが、どこか不自然な文がいくつかある。しかしここでは、典型的な頻度副詞を用いて頻度の意味の用例を分類するためのテストであるため、頻度表示の用例に分類しておいて、詳しくは第 6 章で触れることにする。

13)　今日は朝からよく/非常に(◯)晴れていて、向かいの三宅島がはっきりと見える。(満坂太郎(2005)『海賊丸漂着異聞』)

14)　今もだいすきだということが、よく/非常に(？)わかった。(川上弘美(2002)『あるようなないような』)

15)　二十代・三十代のアメリカに於ける長い新聞記者の体験がよく/非常に(？)生かされており、大衆がどのような記事に興味を持つのか、あるいは恐れおののくかを熟知していたのである。(浅野三平(2002)『八雲と鴎外』)

12)、13)は「非常に」との置き換えが可能なもの、14)、15)は不可能なものであって、12)、13)のような用例は全用例数 2041 例から評価表示と頻度表示の用例数を引いた 1288 例のうち、155 例のみであった。この 155 例を本稿では程度表示の用法と規定し、考察を進める。「よく」が程度副詞として定着しているなら、典型的な程度副詞との置き換えが可能であろうとの発想から始めたテストであるが、文副詞にも入らず、典型的な頻度副詞、程度副詞との置き換えテストも通らなかった用例が数多く残る結果となった。具体的には 1133 例、全用例比 55%が頻度表示でもなく、また程度表示でもなかった。これは、部分副詞としての「よく」の用法に頻度・程度表示以外の用法があることを意味するものである。

この置き換えテストを通らなかった用例を確認しておく。

16)　そんなところがよく書けている。(本多秋五(2005)『物語戦後文学史』)

17)　店の中はよく掃除が行き届いて清潔だし、無口で職人気質のマスターが作る料理もうまく、何かにつけて趣味のうるさい祐美子も気に入っていた。(綺羅光(2002)『美虐』)

18)　明夫、これからいうことをよく聞いてくれ。(柊治郎(2002)『テロリスト潜入』)

19)　でも、落ち着いてもう一度よく見てみると、火が燃えている様子はどこにもありません。(今田真由美(2001)『18 歳、青春まっしぐら』)

20)　ほんとうのところ、私にはよくわかんない。(いしいしんじ(2004)『ぶらんこ乗り』)

21)　また建物の中に入り、廊下を曲がったところで、よく知っている匂いを鼻に感じた。(柴田よしき(2005)『透明な貴婦人の謎』)

以上は典型的な程度副詞との置き換えができなかった用例である。しかし、置き換え不可といって、程度性が全くないとは見られないが、ただしそれより述語の表す状態のありさま

に関する描写が目立つと思われる。それゆえ「動作作用または事態のあり方を表して、主として動詞を修飾する副詞」(国語学大辞典 1980)である情態副詞のような用法と考え、本稿ではこれらを「よく」の情態表示の用法と規定する。

「よく」の用法には先行研究で指摘されている頻度・程度・評価表示以外に情態表示の用法があり、用例数はそれぞれ 493、155、260、1133 例であった。従来の研究で情態表示の用法が明示されていない理由は、程度表示との区別が簡単につかないためであると思われる。しかし本稿では、これまでの考察から程度表示と情態表示の用法を区別する。そして、部分副詞の三つの用法について意味分析を行う。

4. 資料分析

ここでは採取した用例数を示す。まずは前節で明らかになった「よく」の四つの用法がどれくらいの割合で使われているのかに関して、その用例数を次の表 1 に示した。

［表 1］用法別用例数

用　法	用例数
頻　度	493　(24.2%)
程　度	155　(7.6%)
情　態	1133　(55.5%)
評　価	260　(12.7%)
計	2041　(100%)

表 1 から、2041 例のうち情態表示の用法が最も多いことが分かる。しかし、後述するが、その内訳は

「よく」＋「わかる」：419 例
「知る」：157 例
「存じる」：19 例

と、半分以上が、理解に関わるものであり、「よく＋理解動詞」が、セットのように一緒によく使われている。用例数では多いのだが、表現の多様性を考えた上では情態表示の用法が代表的であるとはいいにくいと思われる。

ただし、従来の研究では「よくわかる」類の用例が程度表示の用法に分類されていたため、これらの「よく」は程度副詞と分類されてきた。これを情態表示の用法として独立させると、

用例数は最も多くなる。この四つの用法をその使用割合の高さから順次にみていくと、情態、頻度、評価、程度の順となり、程度を表す用例の割合はわずか7.6%と非常に少ない。

しかし、用例数の多少の観点から、どの用法が中心的、または、どれか一つの用法がプロトタイプであると仮定すると、意味の派生関係がよくわからない。多義の現象はあくまでも意味の派生から生じるものであるため、「よく」の基本的意味を考えると、情態表示の用法は使用数を考えたうえでの最もよく使われる用法に過ぎない。用例数では単純にそれぞれの特徴が解けないため、各用法の意味分析を行う必要があると判断し、次の章では評価表示の用法に関して考察する。

第3章　評価表示の「よく」

1.　本章の目的

森本(1992)は、「よく」のもとの形容詞について「「いい」「わるい」は対象の性質の種類に関してまったく自由であって、ともかくその性質が積極的に評価されるものであるか、消極的に評価されるものであるかを表す語である。したがって評価の面に関しては、いちばん一般的・包括的な上位語の位置を占めているといえる(西尾1972)」とし、「よく」の基本的意味は評価であると記述している。

本章では多義語「よく」の基本的意味が評価であるという立場に従い、その意味が最もよく保たれていると思われる評価表示の用法から研究を進める。前章で確認したように、情態と程度、頻度表示の「よく」は述語や文のタイプと関連すると考えられる。しかし、評価表示の「よく」は基本的な性質が他の用法のそれとは異なっている。本章では評価を表す「よく」の意味的特徴を明らかにするために、「よく」と共起する成分や文の意味に関する考察を行う。考察によって、評価表示の「よく」の文に多く用いられる成分や意味の構成要素が明らかになると予想される。

2.　先行研究と研究方法

「よく」の評価表示に関する先行研究としては、森田(1980)、近藤(1986)、森本(1992)などが挙げられる。

森田(1980)：困難な事柄を遂行したことに対する評価を表す語。
肯定的な評価の場合と否定的な評価の場合とがある。
ある行為をなし得たこと自体が結果となり、それに対する評価になる。

近藤(1986)：感心・賞賛、非難・嫌悪、驚きあきれる心持ちの三つの意味がある。
事柄は過去であっても「よく」の表す心持ち判断は発話時点である。
「ぞ」「も」によってとりたてることが可能である。

森本(1992)：文全体にかかるかどうかは定かではないが、少なくとも他の用法とは異なっている。
ある行為に対する話し手の一種の評価と考えられる。
疑問文と命令文とは一緒に使われない。
既実現の出来事と一緒に使われるため、意志のモダリティとは相いれない。

評価表示の「よく」は、既実現の出来事に対する話し手の評価を表す語で、肯定的な評価と否定的な評価の少なくとも二つの具体的な意味があることが分かる。さらに「ぞ」と「も」

のような助詞を伴うことや疑問文、命令文、また意志のモダリティとは一緒に使われないとの特徴が明らかになっている。しかし、具体的な文の特徴、すなわち共起しやすい成分に関する指摘はなされていない。さらに、肯定的あるいは否定的評価の意味を持つとの説明があるくらいで、なぜそのような意味が発生するのかに関する記述は見当たらない。そのため、本章では、他の用法とは異なる、評価を表す「よく」の文の特徴をまとめたうえで、意味的にはどのような特徴を持っている語であるかに関して明らかにしていく。

研究方法としては、収集した用例をいくつかの観点から分類し分析していくが、用例収集の段階で際立ったいくつかの特徴が他の用法と比較した場合、どのような傾向を表すかを確認する。第2章でみたように、評価表示の用法は2041例のうち、260例あり、これは全体の約12.7%に当たる数値である。

3.　資料分析

ここでは第2章で示した「よく」の用法別分類表を、文体的な相違はないのかということに着目して、会話文と地の文という文体の観点から更なる分類を行った。

［表2］各用法の文体別用例数

用法\文体	会話文	地の文	計
頻　度	114 ［15.9%］(23.1%)	379 ［28.6%］(76.9%)	493 ［24.2%］(100%)
程　度	25 ［3.5%］(16.1%)	130 ［9.8%］(83.9%)	155 ［7.6%］(100%)
情　態	370 ［51.6%］(32.7%)	763 ［57.6%］(67.3%)	1133 ［55.5%］(100%)
評　価	208 ［29.0%］(80.0%)	52 ［4.0%］(20.0%)	260 ［12.7%］(100%)
計	717 ［100%］(35.0%)	1324 ［100%］(65.0%)	2041 ［100%］(100%)

(　)－行の計算で各用法の全用例のうち会話文と地の文の割合

［　］－列の計算で会話文と地の文のうち各用法の用例数の割合

用例を会話文と地の文という観点から分類した結果、頻度表示の用例は 23.1%と 76.9%、程度表示の用例は 16.1%と 83.9%、情態表示の用例は 32.7%と 67.3%とで、三つの用法は

地の文の方にかなり多く使われていた。かつて頻度と程度表示の「よく」は類義関係にある他の副詞に比べ、話し言葉であると指摘されてきたが、この結果からは書き言葉にも非常に多く用いられていることが分かる。それに対し、評価表示の用法は 80.0%と 20.0%とで、会話文の方にはるかに多く使われていることが明らかになった[9]。用いた資料である出版書籍の大半が小説であって、もともと小説自体が通常、会話文より地の文が多いことを念頭に入れると、会話文に出てきた数値は相当多いということができる。会話文は話者の主観的判断を要する表現であるため、特定の話者をもち、評価表示の「よく」は当然会話文に多く現れるのである。

さて、地の文の 52 例は、大きく二つのパターンに分けることができた。それは次のようなものである。

22) 「俺は大丈夫だ。それより―」俺でもギリギリだったのに、よくかわせたな。(仁木健(2003)『マテリアル・クライシス』)

23) 間もなく、国文科の担任の先生から、あなたはよくブラックリストに載らなかったものね、といわれたものである。(平岩弓枝(2002)『極楽とんぼの飛んだ道』)

22)は小説の語り手としてのわたし(=一人称)が存在し自分の話をする場合であり、23)は会話文をそのまま引用した文であって、会話文とそれほど変わらないものである。ただし本章では、個別の話者の意識を追うことができる会話文に研究対象を限定し[10]考察を進める。また、他の三つの用法も会話文の用例を用いて比較分析を試みる。

4. 評価表示の「よく」の文の特徴

評価表示の「よく」の文の特徴について、共起関係を中心に、

⑴ 文の中での位置、

⑵ 助詞や感動詞などの後続語の有無、

⑶ 授受表現特に「～てくれる(「～てくださる、お～くださる」を含む)」の有無、

⑷ 可能表現(レル・ラレル、デキル、‐エルを含む)の有無、

⑸ 打ち消しマーカー(ない、ず、ぬを含む)の有無

という五つの項目に着目してみていく。

---

[9] 心話文は会話文扱いをした。

[10] 会話文の用例数は評価表示の用例全 260 例のうち、208 例である

4.1　文中での位置

評価表示の用例に目を通してみると、

24)　よく、わたしが隠れていることがわかりましたね？(仲路さとる(2001)『異戦国志』)

のように、「よく」から始まる文が多い。その点に着目して、ここでは「よく」の一文の中での位置、特に、文頭かそうではない文中なのかという観点から検討を行う。

［表3］用法別文の中での「よく」の位置

用法\位置	文　頭	文　中	計
頻　度	14　(12.3%)	100　(87.9%)	114　(100%)
程　度	5　(20.0%)	20　(80.0%)	25　(100%)
情　態	74　(20.0%)	296　(80.0%)	370　(100%)
評　価	［51.6%］99(47.6%)	109　(52.4%)	208　(100%)
計	192　(26.9%)	525　(73.1%)	717　(100%)

(　)－行の計算で各用法の文頭と文中の用例の割合

［　］－列の計算で文頭の全用例比評価表示の用例の割合

表3は会話文の用例をもとに、用法ごとに文の中での「よく」の位置を調べたものである。その結果、頻度と程度、情態表示の「よく」は、文中に現れる場合がそれぞれ87.9、80.0、80.0%で、文頭の場合に比べそうでない場合の方が圧倒的に多かった。それに対し、評価表示の「よく」は文中の方に若干多く現れたほどで、半分近くの用例が文頭に表れていた。つまり、評価表示の「よく」は他の用法に比べ、文頭に表れやすいといえる。そしてこの結果は、「よく」が文頭に出てくる192個の用例のうち99例、約51.6%の用例が評価表示の方に偏っているということである。

ところが、表3の文頭というのは、文字列上「よく」から始まる文のみを調べたものであって、文頭ではないが、

25)　うむ、うむ、よく私がしゃべったことを要領よく書き留めておりますな。(木下勇作(2002)『如来が弁護してござる』)

26)　だから、よく志方さんが素直に承諾したと不思議に思っていたところです。(小杉健

治(2001)『それぞれの断崖』)

27)　弥太公こそ、よくここが分かったな。(高橋三千綱(2004)『お江戸は爽快』)

のように、接続詞や感動詞または呼びかけといった独立語の直後に使われた例が61例もある。これらを文頭と同じ扱いをするならば、80%に近い用例が文頭に表れたと言える。ここに「よく」が文頭に用いられた評価表示の用例を挙げる。

28)　よくきたな。(天野かづき(2004)『只今、キミに求愛中！』)

29)　よく、打ち明けてくれたね。(大谷羊太郎(2001)『京都三年坂殺人事件』)

30)　…よくこんな格好で公共交通機関が利用できたな。(三雲岳斗(2004)『ランブルフィッシュ』)

頻度と程度、情態表示の「よく」は、ほとんど文中に現れ、第2章でも確認したように、述語を限定的に修飾する副詞である。それに対し、評価表示の「よく」は文頭に用いられ、28)のように動詞を修飾するもの、29)のように動詞句を修飾するもの、30)のように文を修飾するものもある。これは評価表示の「よく」はその影響を受ける部分が相当広く、文全体を導くモーダルな文副詞といえるもので、他の用法の「よく」とは異なる領域で働く性質を持っていると言える。たとえば、上記の用例から「よく」を除去する。

28)′きたな。

29)′打ち明けてくれたね。

30)′…こんな格好で公共交通機関が利用できたな。

28)′～30)′は「よく」がある場合に比べて命題内容は変わらない。しかし、28)′は予測していた事態の出現、29)′は待っていた事態の出現、30)′は何か驚くべき事態が出現した感じの文ではあるが、何かもの足りない変な意味の文になってしまう。ところが「よく」が加わることにより、話者の意図がはっきりしてくる。単なる命題の伝達ではなく、事態と評価のセットがつくられているのである。このように、評価表示の「よく」は話し手の評価を示し、以下の文全体にかかることが標準的である。しかし、「よく」の位置が文頭ではない用例もある。これを確認しておく。

31)　冗談じゃない。残された日が短ければ短いほど一日一日が必死。そんなことも知ら

ないで、あなたはよく五カ月以上も私をほっといた。(永六輔・田原総一朗(2005)『あの世の妻へのラブレター』)

32)　農家にお嫁に行って苦労したんじゃない。お姑も小姑もいてよくやってきたわね。(芹川芳江(2002)『雪柳』)

33)　物凄い炎だったのに、よくこれほどの財宝が残っていたものだ。(林来寿(2002)『僕の魔法使い』)

31)～33)は評価を表す「よく」の位置が文中の用例であるが、いずれも「よく」が導く部分の前で、文が分けられる。すなわち、完全な二つの文をつなげて作られた文である。たとえば、31)は

31)′「(あなたは)そんなことも知らない」
＋(それなのに)＋「よく五カ月以上も私をほっといた。」

という二つの文から成り立っている文で、「よく」は後ろの文の頭(あるいは句頭)に位置していることが確認できる。32)と33)も同じように、

32)′「お姑も小姑もいた」＋(それなのに)＋「よくやってきた」
33)′「物凄い炎だった」＋(それなのに)＋「よくこれほどの財宝が残っていた」

と文を広げることができる。また、

34)　俺によく付き合ってくれたな。(藤田宜永(2002)『転々』)

のように、単文の文中に用いられている「よく」は、「よく俺に付き合ってくれたな」のように「よく」の位置を文頭に移動させても何の問題もない。すなわち、評価表示の「よく」は文頭指向性が強く、文のモーダルな要素を担う副詞であると確認できる。

4.2　後続語の有無

先行研究で述べたように、評価表示の用法には「よく」に「も」や「ぞ」といった係助詞がつくものがある。さらに「まあ」という感動詞がつくものや「よくもまあ」のように助詞と感動詞が一緒に用いられる例もある。次はこのような後続語があるかないかを調べ、まと

めたものである。

［表4］用法別「よく」の後続語の有無

用法\後続語	有	無	計
頻　度	0　(0.0%)	114　(100%)	114　(100%)
程　度	0　(0.0%)	25　(100%)	25　(100%)
情　態	0　(0.0%)	370　(100%)	370　(100%)
評　価	[100%]36(17.3%)	172　(82.7%)	208　(100%)
計	36　(5.0%)	681　(95.0%)	717　(100%)

(　)－行の計算で各用法の後続語の有無の割合

［　］－列の計算で全用例比後続語有の用例の割合

表4の結果から分かるように、「よく」に後続語が付くということは、他の用法では全く見られない、評価を表す「よく」のみの特徴である。「も」や「ぞ」、「まあ」という後続語は、「よく」を強めていう機能をするため、評価の意味を強調しているといえる。飛田・浅田(1994)によると、「よくぞ」は「相手の困難な行為を評価したり賞賛したりする様子を表す。プラスイメージの語」であり、「よくも」は「憤慨やあきれの気持ちを表す。ややマイナスイメージの語」であるとしている。

35)　たかだかソファに座るだけでもこれだけ慎重にしなければならないくせに、よくぞさっきは自分が救助に行くと吐かしたものだ。(日明恩(2005)『鎮火報』)

36)　十五といえば、右も左もわからぬ年じゃが、よくも仏法修行を思いついたのう。(陳舜臣(2001)『桃源郷』)

37)　よくまあ、あんな状況で奥さんが離婚を切りださないものだと思いますよんなこと言えるな。(吉村達也(2001)『読書村の殺人』)

38)　よくもまあ銀行には金があるもんだな。(末廣圭(2001)『魔性』)

35)～38)は助詞や感動詞がつくことにより、文の客観的な意味が変わったりするのではなく、話し手の気持ちがもっと強く表れているといえ、後続語は評価の意味がよりはっきり表現されるようにする。ただし、 飛田・浅田(1994)の指摘通り、35)のように「よく」に「ぞ」がついた場合は話し手の賞賛あるいは驚嘆の気持ちを表していたが、「よく」に「も」がついた用例の中には36)のように、特に憤慨やあきれの気持ちを表さないものも存在し、38)の

ように、「よくも」に「まあ」がつくとその傾向はさらに薄くなり、

39）よくもまあそんな豆知識を持っているものだ。（尼野ゆたか(2005)『真夏の迷宮』）

のように驚き、あるいは驚嘆の気持ちを表す用例も存在した。

以上、評価表示の「よく」に「ぞ」、「も」、「まあ」などの後続語がつくことについて検討した。この特徴は他の用法では全く見られない評価表示の「よく」のみの特徴であり、後続語がつくことにより話者の判断がよりはっきりしてくる。

4.3　授受表現との関係

評価表示の「よく」は「～てくれる」を伴う例が目立つが、これに関してはグループ・ジャマシイ(1998)にも「〈感激〉の意味を表す場合、「てくれる」と一緒に用いられることが多い」という指摘がある。次の表5は授受表現、特に恩恵を被る意味を持つ、「～てくれる(～てくださる、お～くださる)[11]」を伴う用例の数をまとめたものである。

［表5］用法別「よく」と授受表現との共起関係

用法\授受表現	有	無	計
頻　度	［7.7%］4　(3.5%)	110　(96.5%)	114　(100%)
程　度	［0.0%］0　(0.0%)	25　(100%)	25　(100%)
情　態	［23.1%］12　(3.2%)	358　(96.8%)	370　(100%)
評　価	**［69.2%］36　(17.3%)**	172　(82.7%)	208　(100%)
計	［100%］52　(7.3%)	665　(92.7%)	717　(100%)

(　)－行の計算で各用法のうち授受表現の有無の割合

［　］－列の計算で全用例比授受表現有の割合

「よく」が「～てくれる」のような授受表現と共に用いられる用例は、頻度表示の用例のなかに4例、情態表示の用例の中に12例あり、程度表示の用例では見当たらなかった。それに対し、評価表示の用例は208例のうち36例が授受表現と共に用いられていた。頻度と情態表示の4例と12例は、

[11] 用例の中には「私が覚えているのは『♪げんこつ山のたぬきさん』を祖母にリクエストし、よく歌ってもらったことです。(今田真由美(2001)『18 歳、青春まっしぐら』)」のように、「～てもらう」を伴うものもあったが、評価表示の用例ではなく、頻度か情態表示の用例であった。

40)　これは若い頃おれの先輩がよく話してくれたんだがな。(清川悠山(2003)『意味』)

41)　私の思うところを、常によく知っていてくれます。(志木沢郁(2003)『信貴山妖変』)

のようなもので、評価表示の用例と同じように、相手に恩恵を被ったという意味合いを持つが、用例数的にはそれほど特徴的な数ではなかった。しかし授受表現を伴う全用例の69.2%が評価表示の用例であって、他の用法に比べ文の中で「～てくれる」を伴いやすいといえ、頻度・程度・情態表示の用法と区別される特徴である。用例を挙げ確認する。

42)　俺によく付き合ってくれたな。感謝してるよ。(藤田宜永(2002)『転々』)

43)　よくぞ反対してくださいましたね。私もあのラグネアの森を切り拓くなどということは、正しいとは思っておりませんでした。(高崎悠(2005)『黒百合、白薔薇』)

44)　よくお飲みくださいました。きょうは珍しいものをお召しいただけます。(澤田ふじ子(2002)『黒染』)

評価表示の「よく」は基本的に相手の行為に対して肯定的評価を下す意味を持つが、「～てくれる」表現を用いることにより、聞き手の行為が話し手にとって利益となったとの意味合いを持つようになる。従って、「よく」と「～てくれる」とのセットにより、肯定的評価を下すとともに、感謝の気持ちをも表すことができる[12]。42)～44)の用例はいずれも話し手が聞き手の行為に対して、肯定的評価を下すと共に、「～てくれる」の形式を用いることにより、感謝の気持ちあるいはうれしい気持ちを表していることが分かる。それは上記の用例に「～てくれる」がないと想定してみると、よりはっきりしてくる。

42)′俺によく付き合ったな。

43)′よくぞ反対しましたね。

44)′よく飲みました。きょうは珍しいものをお召しいただけます。

42)～44)と42)′～44)′を比較してみると、文の客観的な意味は変わっていないが、「～てくれる」がないことにより、話し手の感謝や嬉しさなどの気持ちが感じられにくくなっており、42)′は一つの文として何か物足りない感じもする。このように評価表示の「よく」

[12]　文脈によっては皮肉となり、マイナス評価になる場合もあるが、それに関しては本章の 5 で触れることにする。

は、「～てくれる」を伴う文が他の用法に比べずいぶん多く、それは聞き手の行為によって何らかの利益を受けたと解釈され、授受表現がないと、話者の気持ちが十分に表現しきれていないともいえ、「よく」が持っている肯定的評価の意味と非常に親和的であると判断される。

4.4　可能表現との関係

「よく」と可能表現との共起関係を確認する。次の表6は可能表現(-レル・ラレル、デキル、-エルを含む)を伴う用例数をまとめたものである。

［表6］用法別「よく」と可能表現との共起関係

用法\可能表現	有	無	計
頻　度	0　(0.0%)	114　(100%)	114　(100%)
程　度	0　(0.0%)	25　(100%)	25　(100%)
情　態	0　(0.0%)	370　(100%)	370　(100%)
評　価	［100%］41　(37.6%)	167　(62.4%)	208　(100%)
計	41　(5.7%)	676　(94.3%)	717　(100%)

(　)－行の計算で各用法のうち可能表現の有無の割合

［　］－列の計算で全用例比可能表現有の割合

表6から可能表現と共起する用例は全用例のうち41例あり、それは全て評価表示の用例であることがわかる。評価表示の「よく」は可能表現との呼応度が他の用法に比べ非常に高いといえる。頻度と程度、情態を表す「よく」が、可能表現と全く共起しないのに対し、評価表示の用例の共起率は約37.6%であった。文の意味は話し手が聞き手の能力に対して肯定的評価をするとともに、その能力に対して感心したという気持ちを表す。

45)　しかし、急に上陸して、よく車が借りられたもんだね。(内田康夫(2003)『氷雪の殺人』)

46)　よく順番に言えるわね。(清野美智子(2004)『0磁場の果実』)

47)　よく正座できるわね！　私なら、足、しびれちゃう。(赤川次郎(2005)『恋占い』)

用例はそれぞれ45)では「車が借りられた」こと、46)では「順番に言える」こと、47)では「正座できる」ことという聞き手の行為能力に対して、話し手が肯定的評価、具体的には

感心や驚きの気持ちを表している。可能表現を伴った可能文であると同時に、聞き手に対する発話であるだけに二人称主語の文である。つまり、二人称主語の可能文は評価表示使用の契機となるのである。45)～47)の可能表現を削除して比較してみよう。

45)′ しかし、急に上陸して、よく車を借りたもんだね。
46)′ よく順番に言うわね。
47)′ よく正座するわね！　私なら、足、しびれちゃう。

45)′～47)′は45)～47)に比べ文の客観的な意味が変わったりもせず、完全な文としても成り立つ。しかし、可能表現との共起により、聞き手の能力に対する話し手の評価がより明らかに表現される。このような現象は「よく」が基本的に肯定的評価を表す語であるため、聞き手の能力を表す可能表現との共起が起こりやすいのであると判断される。

4.5　打消しとの関係

次に「よく」と打消しマーカーとの共起関係について検討する。次の表7は打消しマーカー(ない、ず、ぬ)の有無をまとめたものである。

［表7］用法別「よく」と打消しマーカーとの共起関係

用法\打ち消し	有	無	計
頻　度	0　(0.0%)	114　(100%)	114　(100%)
程　度	0　(0.0%)	25　(100%)	25　(100%)
情　態	114　(30.8%)	256　(69.2%)	370　(100%)
評　価	**2　(1.0%)**	206　(99.0%)	208　(100%)
計	116　(16.2%)	601　(83.8%)	717　(100%)

(　)－各用法のうち打消しマーカーの有無の割合

打消しマーカーは、頻度と程度表示の用例では見つけられず、情態表示の用例に最も多く現れたが、情態表示の場合、決まり文句とも言えるほど実際よく使われる「よく」＋「わからない」、「よく」＋「知らない」のような用例が114例のうち94例も占めていた。それに対し評価表示の用例は、208例のうち2例に打ち消しマーカーが含まれていた。以下に用例を挙げる。

48)　あなた、こんな所に何十年もいて、よく発狂なさいませんでしたねえ。(島尾ミホ外(2003)『ヤポネシアの海辺から』)

49)　結局、気が狂いそうになってやめたよ。あんたはこんなものを訳してて、よく気違いにならんねえ。(筒井康隆(1988)『突然変異幻語対談』)

以上の用例は形式的には打消しマーカーを含んでいるものの、意味的には打ち消しマーカーを伴ってはじめて肯定の意味になる文である。すなわち48)は「発狂しないでいられる」、49)は「気違いにならないでいられる」という潜在的な能力可能表現であるといえる。そのため、打消しマーカーはあるものの、否定的な意味ではなく、逆に肯定的な意味になり、評価表示の「よく」が否定文と共起しにくい現象に逆らう用例ではないと判断される。

要するに、基本的に評価表示の「よく」は肯定的評価を表す語であるため、打消しとは共に使われにくく、ほぼ肯定文として用いられるのである。

4.6　まとめ

これまでの考察を踏まえ、頻度、程度、情態、評価表示の用例のうち、五項目の着眼点に該当するをものを100%に換算[13]して表示すると、次の表8のようになる。

［表8］各用法の五項目との関係

用法\特徴	文頭	後続語	授受表現	可能表現	打消し
頻　度	7.3%	0.0%	7.7%	0.0%	0.0%
程　度	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
情　態	38.5%	0.0%	23.1%	0.0%	98.3%
評　価	**51.6%**	**100%**	**69.2%**	**100%**	**1.7%**
計	100%	100%	100%	100%	100%

評価表示の「よく」は、頻度、程度、情態表示の用法に比べ、文頭に来やすく、後続語を伴うことができる。さらに授受表現、可能表現との共起は約69.2%と100%という相当高い割合を占めている。一方評価表示の「よく」が打消しと共起するものは1.6%にとどまっており、それらは例外的なものであることが確認できた。さらに打ち消し以外の四項目のうち、

[13]　例えば、p27 の表 3 で「よく」が文頭にくる用例は全 192 例であった。用法別には頻度表示の用例で 14 例、程度表示の用例で 5 例、情態表示の用例で 74 例、評価表示の用例で 99 例と現れ、全 192 例を 100%とみてそれぞれのパーセンテージ(7.3、2.6、38.5、51.6%)を示したのが表 8 である。

一つ以上の項目を持っている用例は評価表示の202例のうち149例あり、

50)　本当によくぞ駈けつけてくれたな。(門田泰明(2004)『大江戸剣花帳』)
51)　よくそんなことが言えるわね。(末永直海(2001)『合鍵の森』)

50)は後続語、授受表現、51)は文頭、可能表現と二項目にわたっているように、二項目以上を掛け持っているのは52例もあった。

以上、評価表示の「よく」は文副詞であることから、他の用法とは区別される特徴を持っており、それを文の中で確認することができた。次に評価表示の「よく」の文意に焦点を絞り、考察を進める。

5.　意味による分類

評価表示の「よく」の用例を文の意味によって分類をしてみた。分類の際、先行研究や多くの辞典に記述されているように、肯定的評価の場合と否定的評価の場合とに分けたが、評価表示の「よく」は用いられる場面が限定されており、文脈依存性が高いため、文脈によって肯定的か否定的かを判断し分類した。たとえば

52)　よくぞ反対してくださいましたね。私もあのラグネアの森を切り拓くなどということは、正しいとは思っておりませんでした。ルカイヤ様とフレイヤ様が反対してくださって、内心ほっとしました。お二人のそういう優しいお心遣いが、私はとても好きです。(高崎悠(2005)『黒百合、白薔薇』)

のような用例は「よくぞ反対してくださいましたね」の部分だけ見ると肯定的評価か否定的評価かよく判断できない。しかし後文脈の内容から話者が肯定的意味で発話していることがわかる。本節では前後の文脈から肯定的評価と否定的評価とに判断したものをもとに、肯定と否定といった具体的な意味や文の構造などについて、具体的に考察する。

5.1　肯定的な評価

文脈によって肯定的評価と判断した用例を、評価の具体的な意味によってさらなる分類を試みた。まず、評価表示の典型的なものといえる賞賛の意味で用いられているものをとりあげる。言葉の意味通り、相手の行為に対して賞賛をする、ほめ言葉といえるものである。

53)　そうだなあ。ただでさえ長いのに、毎日苦しい苦しいと言いながらよく頑張ったなあ。(村田猛(2005)『来世も二人で』)

54)　家内には本当に苦労をかけました。結婚してひと月もたたないうちに私は召集されましたから、戦争の間中、その後捕虜生活を送って復員するまで、足かけ六年傍にいてやれなかったのです。 よく待っていてくれたと思います。(帚木蓬生(2001)『安楽病棟』)

55)　よくやってくれた。君のおかげでこの国の危機は救われたよ。(井沢元彦(2002)『一千年の陰謀』)

53)～55)は相手の「頑張った」こと、「待った」こと、「やった」ことに対して話し手が肯定的評価をし、ほめたたえているものである。さらに54)と55)は賞賛のうえに、「待ってくれた」、「やってくれた」ことに対する感謝の気持ちも読み取れるが、感謝の気持ちは本章の4.3で確認したように、「よく」の働きというよりは「よく＋～てくれる」のセットによる意味であると見られ、評価表示の「よく」の基本的な意味は相手の行為に対する賞賛を表している。ところが、評価表示の「よく」の用例の中には、53)のように程度を表す「よく」と紛らわしいものがある。

56)　はい、よくできました。(松りんこ(2003)『誰よりいちばんっ！』)

57)　農家にお嫁に行って苦労したんじゃない。お姑も小姑もいてよくやってきたわね。(芹川芳江(2002)『雪柳』)

58)　よく我慢されましたね。(高里椎奈(2001)『本当は知らない』)

59)　でも私のことがよくわかりましたわね。(土屋明子(2005)『風光るサバンナ』)

56)～59)の例はいずれも53)と同じような例とみてよく、程度性ともとらえられる用例である。確かに「できる、やる、我慢する、分かる」という動詞は量的に捉えられ、程度的にも用いられる動詞である。さらに「よく」の修飾を受ける動詞は用法による制限がゆるいため、一つの文だけでは見分けられない場合も出てくる。評価表示の用例と程度的に使われた用例を挙げ、考えてみる。

60)　でも私のことがよくわかりましたわね。(土屋明子(2005)『風光るサバンナ』)

61)　あなたの考えはよくわかりました。(穂高巴里(2005)『花雪の降る場所で』)

60)と61)は両方とも「よく」＋「わかる」の組み合わせからなっている文である。しかし本稿では、60）は評価表示の用例に分類し、61)は程度的に使われた用例であると判断した。その基準は話者が、動詞の量的程度を話題にするかしないかの違いであると思われる。「わかる」という動詞自体が持っている特徴、すなわち量的に捉えられるという特徴のため、両方ともゼロから最大値の間のどの程度かという、いわば〈程度性〉を持っていることを認めざるを得ない。ところが、60)での話者は「私のこと」についてどれくらいわかっているかという「わかる」程度より、「私のことをわかっている」こと自体を話題にしている。それに対し、61)の話者は量的程度の高さに重点を置き、「あなたの考え」について「十分わかった」との意味で発話しており、その度合いを話題にしているのである。要するに、評価表示の「よく」の場合も程度的に用いられた「よく」の場合も、量的動詞との組み合わせにより〈程度性〉を持つようになるといえるが、話者が動詞の量的程度に重点を置いて発話するかしないかによって、具体的な用法は分類できるのである。

次に、肯定的評価を表すものには、次のようなものがある。

62)　よく来てくれましたね。みえないのじゃないかと心配していましたよ。(内田康夫(2003)『記憶の中の殺人』)

63)　いらっしゃいませ、よくおいでなさいました。(南原幹雄(2004)『吉原おんな市場』)

64)　よくいらっしゃいましたな、王女、メガエラ殿下！(五代ゆう(2005)『パラケルススの娘』)

62)～64)の用例は「来る」の意味を持つ動詞と組み合わさって、賞賛というより歓迎の気持ちを表すものである。62)のように「～てくれる」を用いて、「あなたがわたしのところに来た」ことに対する、恩恵あるいは感謝の気持ちを一緒に表す用例が多い。

次に、肯定的評価の用例には、驚嘆あるいは軽い驚きを表すものもある。

65)　お帰りよ、お二人さん。…よく生きてたな。(和田賢一(2003)『ヴァロフェス』)

66)　おお～！よくこんなものが残ってたな～。(三井秀樹(2001)『シャーマンキング』)

67)　物凄い炎だったのに、よくこれほどの財宝が残っていたものだ。(林来寿(2002)『僕の魔法使い』)

65)～67)の用例からは、賞賛や歓迎の意味は読み取りにくい。さらに賞賛や歓迎の場合、

評価の対象がヒトの行為であったならば、驚嘆の場合は66)と67)のように、事物や場所、状態などのヒトではないものも多く、その様子に対する話者の感心や驚きを表している。さらに67)のように「～ものだ」という表現を用いることによって、驚いた気持ちをよりはっきり表現する用例が多い。

以上、肯定的評価を表す「よく」は具体的に賞賛、歓迎、驚嘆の意味を表していることが確認できた。

5.2　否定的評価

否定的評価を表す用例は、相手の行為に対する非難を表す意味を持つ。しかし、「よく」自体が持っている肯定的評価の意味のため、「よく」以下の部分だけでは肯定的か否定的かが分からない文が多いが、文脈からすると強い非難を表しているのである。

68)　なにいってんのよ。さっき、あんなことをして、よくもどってこれたわね。（さとうまきこ(2004)『ぼくの・ミステリーなぼく』）

69)　冗談じゃない。残された日が短ければ短いほど一日一日が必死。そんなことも知らないで、あなたはよく五カ月以上も私をほっといた。（永六輔外(2005)『あの世の妻へのラブレター』）

70)　証拠も動機も見当たらなくて、よくあなたはそんなことを口に出せるものですねぇ。（高田崇史(2003)『QED』）

68)～70)の例のように、非難の意味を表す用例の中には「よく」以下の部分だけをみると、肯定的か否定的かよく判断できないものが多い。その判別を可能にするのは前後の文脈である。たとえば68)は「よくもどってこれたわね」の部分だけをみると、肯定的評価であると判断しやすい。しかし、前文脈の「なにいってんのよ。さっき、あんなことをして」によって、単なる肯定的評価ではないことが分かる。69)も同じように前後の文脈によって、「五カ月以上も私をほっといた」ことが相手の行為に対してほめているのではなく、非難していることが分かる。また70)も「証拠も動機も見当たらなくて」という前文脈によって、「よくあなたはそんなことを口に出せるものですねぇ」が相手に対する非難を表していることが分かる。

さらにこのようなものには、文の中に悪いイメージの語を用いて非難の意味を強調するものもある。

71)　でも、よくこんなにも簡単に私を裏切れるものだ。(松本昭夫(2004)『精神病棟に生きて』)

72)　よくもそこまで人を見くびってくれたものだ。(茅田砂胡(2003)『デルフィニア戦記』)

73)　よくもおれの息子を痛めつけてくれたな。このクソッタレ野郎。(高崎悠(2005)『黒百合、白薔薇』)

71)～73)の用例は文の中に「裏切る、見くびる、痛めつける」といった、「よく」の肯定的評価の意味に反するマイナスイメージの語を用いることにより、否定的評価を強調している。そのため68)～70)の用例とは異なり、「よく」以下の部分だけでも〈非難〉の意味を表していることがわかる。しかし、先述のように否定的評価の場合、68)～70)のように言葉は肯定で評価の内容は否定になる、あるいは71)～73)のように肯定的意味の語に否定的意味の語を用いて強い否定的意味を表す特別な現象である。言語形式と内容が一致しない、いわば皮肉といえるものである。しかし、評価の内容を決めるのは、意味の問題ではなく、文脈や場面の処理をどうするかという、言葉の運用の問題にかかわる。意味の面を論じる本稿では、否定的評価の場合はレベルを超えた問題になると考えられるため、指摘にとどめる。本章では、評価の具体的な意味とは関係なく、「よく」が導く文自体が同じ構造を持っていることに注目し、次の節で述べる。

6.　意味のしくみ

以上、評価表示の「よく」をその意味によって分類し、具体的な評価の意味は賞賛、歓迎、驚嘆、非難といった四つに現れることが確認できた。しかし、先述のように、評価の意味にかかわらず、肯定的評価であろうが、否定的評価であろうが、すべての用例が同じような文のしくみを持っており、その構造から分かるのは、評価表示の「よく」が話し手の予想とは異なる場合に、よく出やすいのではないかということである。先述の用例をもう一度挙げると、

74)　そうだなあ。ただでさえ長いのに、毎日苦しい苦しいと言いながらよく頑張ったなあ。(村田猛(2005)『来世も二人で』)

75)　よく来てくれましたね。みえないのじゃないかと心配していましたよ。(内田康夫(2003)『記憶の中の殺人』)

76)「おお～！よくこんなものが残ってたな～。」葉は鬼人の絵と一緒にショーケースに

飾られている刀を見つめていた。「春雨…。これが阿弥陀丸の使ってた刀か…」それは錆び付き、ボロボロになった刀だった。(三井秀樹(2001)『シャーマンキング』)

77)　証拠も動機も見当たらなくて、よくあなたはそんなことを口に出せるものですねぇ。(高田崇史(2003)『QED』)

のような用例で、「よく」の具体的な意味はそれぞれ賞賛、歓迎、驚嘆、非難を表している。しかし、その文のしくみは全部同じであるとみられる。74)の「がんばった」こと、75)の「(相手が)来た」こと、76)の「これほどの財宝が残っていた」こと、77)の「(相手が)そんなことを口に出せる」ことは、話し手にとっては予測していた事態とは異なる事態である。その予想外の事態が実現した時の話し手の評価を表すのが「よく」なのである。すなわち、ここでいう予想外とは実現された事態が、予測していた事態と異なることであると規定でき、三つの場合がありうる。まず、その予測が現実と反対の予測である場合(－予測)、次に特に何も予測していなかった場合(０予測)、また、実現された事態をある程度予測していた場合(＋予測)が想定できる。用例74)を挙げ具体的に説明する(ここでは前後文脈は考慮しない)と、話者の予測と発話は次のようになる。

－予測：あまり頑張らないと思う予測
　　→あまり頑張らないと思ったが、よく頑張った。
０予測：何の予測もしない予測
　　→頑張るかどうか何の予測もしていなかったが、よく頑張った。
＋予測：よく頑張ると思う予測
　　→よく頑張ると思っていたが、それ以上もっとよく頑張った。

以上のように、発話の基準になる話者の予測は三つの場合があり得る。予測は話者の心の中にあるものであるため、話者自身しかわからないことではあるが、前後文脈からある程度推測できる。用例から考えてみると、74)の話者は相手が毎日苦しい苦しいと言っていたので、あまり頑張らないと予測した可能性が高い。それにもかかわらず自分の予測と違って「よく頑張った」としているのである。また75)の話者は後文脈から相手が来ないだろうと予測していた可能性が高い。しかし、自分の予測とは違って、来てくれたと発話している。76)の話者は前後の文脈から、ほとんど来る者のない場所に錆び付いたボロボロの刀が残っていることについて、何の予測もしていなかった可能性が高い。特に何も予測していなかったのに、刀が残っていることを見て驚いているのである。また77)の話者は相手がそんなこ

とを口に出せるところではないと予測していた可能性が高い。しかし自分の予測とは違って口に出したことに対して非難しているのである。このように、予測というのは発話の基準でありながら、文脈的な前提となり、文脈制御機能をもつ。文全体を導き、話者の伝達態度を表示するために、本章の4.1で確認した、「よく」の文頭指向性の強い理由となる。

要するに、評価を表す「よく」の〈評価性〉とは、予めもっていた三つの予測のいずれかを基準にして、それとは異なる、予想外の結果であることに対する話者の(通常肯定的)評価である。そして、文の肯否というのは話者の予測と、それとは異なる結果とのズレからくる現象に過ぎない。

したがって、評価表示の「よく」を説明するに予想外というのはとても重要な特徴であると思われる。さて、日本語の副詞の中には、「よく」と同じように予想外の命題に対する話し手の気持ちを表す「まさか」という副詞がある。次の節では二語を比較し、「まさか」とは異なる「よく」の特徴に関してさらに明らかにしていく。

6.1　「よく」と「まさか」の比較

評価表示の「よく」の〈評価性〉が持っている、予想外という意味特徴をより深く検討するために、同じような特徴を持っていると思われる「まさか」という副詞を対象に比較研究を行う。まず、「まさか」の副詞的用法に関する記述は、飛田・浅田(1994)、森田(1998)、杉村(2000)、小池(2002)などが挙げられる。そのうち飛田・浅田(1994)および森田(1998)は「まさか」の意味に関して、「事態成立の可能性を否定する表現」としており、杉村(2000)は、「当該の事態が想定外のものであることを表す表現」であると説明している。また、小池(2002)は先行研究を踏まえた上で、事態が成立したか否かによって「想定外(私は、マサカ本当に宇宙飛行士になれるとは思わなかった(小池2002：15))」と「事態成立の否定(マサカ社長にそんなことは言えないよ(小池2002：15))」とに大きく分けられると説明している。そのうち、本稿の「よく」の予想外と比較できるのは想定外の「まさか」であると判断し、小池(2002)のいう想定外の「まさか」を対象に、比較分析を行う。用例は同じように中納言を利用し収集した。「まさか」の用例を挙げる。

78)　退屈のなせる業であって、その時はまさか、あとでそんなとてつもない大騒ぎになるなどとは夢にも思わなかった。(筒井康隆(1996)『アルファルファ作戦』)

79)　けれどいつも観る方ばかりで、まさか私がノベライズすることになるとは考えてもみませんでした。(唯川恵(1995)『恋人までの距離』)

80)　どこで手に入れたのか、まさかバイクであとをつけて来るとは、予想もしなかった。

（逢坂剛(2002)『熱き血の誇り』）

81)　日本橋を出発したときにはまさか下仁田でこんにゃくを食べることになるとは…夢にも思わなかった。（藤原寛一(2001)『モーターサイクリスト』）

想定外の意味を表す「まさか」の用例は先行研究からも明らかになっているように、命題の事態がすでに成立していることが分かる。78)は「あとでそんなとてつもない大騒ぎになった」という意味を含意しており、79)も「私がノベライズすることになった」、80)は「バイクであとをつけて来た」、81)は「下仁田でこんにゃくを食べることになった」と、想定外の事態がすでに成立している。これらの事態の想定外というのは、現実と正反対の予測(－予測)、あるいはとくに何も考えていなかった予測(０予測)を基準に、実現された事態が予測と反対であることであり、命題が現実になる可能性(＋予測)は全く想定していないのである。そして、「まさか」の構文をみると、すでに小池(2002)に明らかになっている通り、

まさか＋[…命題…]＋とは(なんて・など)＋思考動詞＋なかった

のようなものが多い。構文だけでも「まさか」は「命題の事態が成立したことは想定外のことだ」というのを表していることがよく分かる。それに対し「よく」は、構文的に

よく＋[…命題…]＋ね(φ、な、ものだ)

のようなものが多く、「まさか」の構文が、命題部分を「まさか」と「とは＋思考動詞＋なかった」が包んでいる形であるのに対し、「よく」の構文は「よく」が命題部分を直接修飾する形を取っている。用例から確認すると、

79)′まさか＋[私がノベライズすることになる]＋とは＋考えてもみ＋ませんでした。

67)′…、よく＋[これほどの財宝が残っていた]＋ものだ。

となり、79)′の「私がノベライズすることになった」ことが、予測した事態、すなわち、私がノベライズすることにならないと思う－予測、あるいはとくに何も予測していない０予測の二つの予測を基準に、それと反対である想定外(＝予想外)の事態が実現したことを表す表現である。それに対し67)′の「これほどの財宝が残っていた」ことは、話者の意識の中にある予測、つまり、財宝が残っていないと思う－予測、とくに何も予測していない０予測、

あるいは財宝が残っているかもしれないと思う＋予測の三つの予測を基準に、予想外の事態が実現されたことを表す表現である。

要するに「よく」と「まさか」の最も大きな相違は、話者が＋予測をしているかいないか、すなわち、実現可能性を想定しているかいないかのことであると思われる。「まさか」の話者は実現する可能性については全く想定しないでいる。しかし「よく」は＋予測の場合があり得るため、ある程度予測したが本当にそうだったというような文脈的意味がある。従って、「よく」の特徴について予想外とは表現したものの、その中には全く予想を外れたという場合もあるが、予想したがそれよりももっと、というような含意もあるとした方が妥当であると考えられる。となると、「よく」は「まさか」の特徴とは異なる意味での予想外という特徴を持っていることが明らかになる。そしてこの予想外という意味特徴は、評価表示の「よく」の〈評価性〉という意味の構成要素を成すものであるため、「まさか」の用例からは読み取れない意味が出てくる。たとえば、本章の4.3で取り上げた、授受表現との共起が起こりやすいということは、そこから感謝あるいは驚きの意味が読み取れるが、それは予想していなかったことを聞き手がしてくれたためであると解釈できる。また、可能表現と共起しやすい理由は、話者が気づいていなかった聞き手の潜在能力が予想外のことであるためであって、「よく」はそれに対する驚きあるいは非難などを表すことができるのである。

6.2　まとめ

評価表示の「よく」の特徴について考察を行った結果、まず評価表示の「よく」の文の特徴は、ほぼ肯定文として用いられ、文頭指向性が強く、「も」や「ぞ」などの後続語を伴うことが可能であることが明らかになった。さらに、「～てくれる」という授受表現と可能表現との共起が起こりやすく、それは予想外という意味特徴とも深く関係していた。また、具体的には賞讃、歓迎、感心、非難といった評価の意味を持つが、いずれも文のしくみは同じで、予測していたことと異なる事態が実現したことに対する話し手の(通常肯定的)評価を表していた。そして評価の際、基準が話者の意識にあり、評価も話者の判断なので、評価表示の「よく」の用例がほとんど会話文に偏っていると思われる。要するに、評価表示の「よく」は動詞文を対象に予想外の事態とそれに対する話者の(通常肯定的)評価を表すものである。

第4章　情態表示の「よく」

1.　本章の目的

本章では「よく」の情態表示の用法について考察を行い、従来の研究に程度副詞的に認められてきた「よく」の用法に程度的用法と情態的用法の二つがあることを確認し、程度的用法とは異なる情態的用法について構文的・意味的特徴の観点から検討を行う。そして、なぜ従来の研究では「よく」が程度副詞的に捉えられてきたのかに関する検討を試みるほか、「よく」の表す〈情態性〉とは具体的に何かについて明らかにする。

2.　先行研究と研究方法

第2章で確認したように、「よく」の情態表示の用法は第3章の評価表示のそれとは違って、述語だけを修飾する部分副詞であり、典型的な程度副詞との置き換えが不可能なものであるため、程度表示の用法とは区別されるものである。しかし従来の研究では「よく」の情態表示の用法を程度副詞的に分類してきたため、この情態表示と程度表示の用法というところに焦点を置いて、近藤(1986)、森田(1980)、日本国語大辞典第二版(2002)と萩原(2004)を検討する。

まず、近藤(1986)は「よく」には主に頻度・程度・ムードの三つの用法があるとし、そのうち程度用法については状態性動詞、動作性動詞と共起する場合とに分け、「よく」は「状態の意味を持つ述語動詞の程度性を表」し、動作性動詞の場合には、「動詞に関してその極限的な程度を規定する」と述べ、全体的に「よく」の持つ程度性を中心に論述している。そのため、三つの用法以外に他の用法があること、特に情態副詞的な用法やその関係性などに関しては触れていない。

次に、森田(1980)は「よく」が「行為・作用の完全さを表す場合」があるとし、「行為を遂行することへの評価が、行為そのものの評価へと移行する」と述べ、頻度と評価表示の用法以外の用法に関して記述しているが、本稿で取り上げようとする程度や情態的用法に関して具体的に分けて説明してはいない。そしてそのような傾向は飛田・浅田(1984)にもみられる。

また日本国語大辞典第二版(2002)では、頻度、評価と共に〈十分に〉と〈非常に〉とを個別の意味項目に入れ、「よく」に四つ意味があると述べている。しかし、辞典の記述であるため具体的な記述はなく、用例としてあげられているのは古典からの資料のみであるため、現代日本語の中にも四つの意味がそのまま生きているのか多少分かりにくい点がある。ただし、古典を以て〈十分に〉と〈非常に〉を分けていることは、現代日本語にも頻度と評価表示の用法以外に二つの用法があることを裏付ける資料になるのではないかと思われる。

最後に萩原(2004)は統語上の位置という観点から程度を表す「よく」を考察した結果、

「①もともと「よく」の持っている意味的スコープはすぐ後ろの部分を修飾する②＜頻度＞の意味を表す「よく」は、名詞・形容詞・動詞を修飾できる③＜程度＞の意味を表す「よく」は、動詞を好んで修飾しその意味的スコープは＜頻度＞よりも狭い」と述べ、頻度と程度表示の用法を中心に論述している。

先行研究では「よく」に情態的用法があることに関して触れているのは見つからなかった。ただし、日本国語大辞典第二版(2002)に〈非常に〉と〈十分に〉の意味があるというような記述があり、〈非常に〉は〈程度性〉を、〈十分に〉は〈情態性〉を意味するとみて、頻度と評価表示の用法以外に二つの用法があるという根拠にしても良いのではないかと思われる。そのため、本章では「よく」に頻度、評価表示の用法以外の用法に少なくとも二つが存在すると考える。そして典型的な程度副詞との入れ替えテストを通し、可能なものと不可能なものには意味的かつ文法的に若干相違が見られ、前者は程度的用法、後者は情態的用法と認め考察を進める。本章では、まず情態的用法から検討を行う。

3. 資料分析

第3章の二つのテストから情態表示の用法となった用例は1133例であり、この数値は全用例の半分以上を占める相当高いものである。それらを文体によってさらなる分類をすると、会話文に出てきた用例は370例、地の文に出てきた用例は763例で、地の文の方に2倍以上多く使われていることがわかる。本章では情態表示の用例をもとに、具体的な意味による分類を試み、それぞれの特徴について明らかにしていきたい。

4. 意味による分類とその特徴

第3章でみたように、「非常に」との入れ替えが不可能であった用例は1133例であり、それらが事態のあり方を表していることに着目し、これからはその意味を〈情態性〉とよぶ。以下、用例を意味的特徴から分類を試みた結果、大きく三つに分けることができた。まず、その第一類の用例をここに挙げる。

82) 読んで大東は、よく書けている、一度編集長に読ませてみようと言ってくれたんです。(谷川涼太郎(2004)『京都・尾道れんが坂の殺人』)

83) それは彼が今取り組んでいるというピエタにもよく表れていた。(平野啓一郎(2002)『葬送』)

84) そしてよく磨かれたナイフやフォークをいそいそと並べる。(鴨居羊子(2004)『カモイ・ヴァラエティ』)

85)　大通りのよく整備された道、街路樹、歩道、西洋風建築の家、土蔵造りの商家、軍隊施設、各種の学校、各所の河岸市場などなど、篤にはすべて興味深いものであった。（松定ちよし(2001)『桃の木のトリック』）

86)　結露にうっすらと曇った窓ガラスの向こうには、よく手入れされた庭が見おろせ、その眺めもまず上等のホテル並みだった。（平石貴樹(2002)『笑ってジグソー、殺してパズル』）

第一類は〈情態性〉の用例1133例のうち、55例(約4.9%)に当るもので、数的には最も少ない類型である。意味的には、「(前文脈の何かが)書けている」(82)、また「それがピエタに表れている」(83)、「ナイフやフォークが磨かれている」(84)、「道が整備されている」(85)、「庭が手入れされている」(86)、それぞれの状態がどのように充実しているかということに関して言及するものである。同様の機能をもつものに、「うまく」、「ちゃんと」などがあり、人間の注意が入った仕事が充実していて、それが結果として現れているという、その充実性を表すものである。この類型の文法的な特徴は上記の用例以外にも「洗濯された、整えられた、描きこんである、生かされている、鍛えられた」などのように、「-ラレ-」や「-テアル」また、「-テイル」といった結果としての状態を表す形式との共起率が高いということで、ある事態が完成している結果の充実性を取り立てる類型である。

以上、充実性というのは、「よく」の〈情態性〉という意味特徴が文の中で具体的に表れる意味であることがわかる。

次に、第二類の用例を挙げる。

87)　理瀬は真面目にその可能性を疑っていた。が、よく観察してみても、少々酔っていること以外に、その兆候は見当たらない。（恩田陸(2004)『東京伝黄昏の百合の骨説』）

88)　よく調べてみると、ＪＲ中央線の電車に飛び込んで死ぬ自殺者も、きわだって多いんだ 。（早野梓(2002)『幸福の遺伝子』）

89)　この記録をもう一度よく見てください。（御堂地章(2005)『日本崩壊』）

90)　明夫、これからいうことをよく聞いてくれ。（柊治郎(2002)『テロリスト潜入』）

91)　一年くらい前に会ったんじゃないかな。よく覚えていませんね。（西村京太郎(2001)『西伊豆美しき殺意』）

第二類の用例は、1133例のうち234例(約20.7%)があり、用例の多くが「見る、聞く、覚える」あるいはこれらの類義動詞(見きわめる、見回す、聞き取る、記憶する等)に偏ってい

た。意味的特徴は、「観察する」(87)、「(前文脈の何かを)調べる」(88)、「記録を見る」(89)、「これからいうことを聞く」(90)、「(全文脈のことを)覚える」(91)ことをいかにはっきりするかに言及することにより、話者が意志を持って感覚や記憶を通し入手した情報が、はっきりしているさまを表現する、その確実性を取り立てる類型である。なお、この類型が他のものと区別される最も大きな特徴は、89)と90)のように述語に依頼や命令の形式を伴う用例が目立つことで、234例のうち55例があった。工藤(1983)は「程度副詞の多くは…(用例省略)…命令・勧誘・決意(意志)など、聞き手や話し手自らに向かって、事柄の実現を〝はたらきかける〟叙法とは共起しないか、しにくいようである」と述べ、この類型は程度副詞の一般的な特徴を持っていない、すなわち、程度表示の用法とは区別される特徴であるとの裏付けになると思われる。

以上、第一類の充実性に続き確実性も、「よく」の〈情態性〉の意味特徴が文の中で具体的に現れるの意味の一つであるといえる。

最後に、第三類の用例を挙げる。

92)　近ごろの映画は役柄があるだけで、俳優がいるのかいないのか、よく分からない。(開高健(2003)『風に訊け』)

93)　お兄ちゃんは、ヨゴ人はタルの民をよく知らないし、軽蔑していない、といっていたけれど、ためしてみる気にはなれなかった。(上橋菜穂子(2003)『神の守り人』)

94)　満雄は突然違う人物になってしゃべり出したさち子に驚いて、話の内容はよく飲み込めなかった。(内田春菊(2004)『準備だけはあるのに、旅の』)

95)　とくに鎌倉で禅宗が抵抗を受けずに迎えられたという事情は、私たちにもよく納得しうるところではないだろうか。(澁澤龍彦(2005)『私の古寺巡礼』)

96)　貴美子が言っていることは、僕にもよく理解できた。(井上夢人外(2005)『クラインの壺』)

第三類は〈情態性〉の用例1133例のうち、844例(約74.5%)がそれに該当し、第一類と第二類に比べ圧倒的に多い類型である。意味的には「俳優がいるのかいないのか分かる」(92)、「ヨゴ人はタルの民を知る」(93)、「話の内容をのみこむ」(94)、「事情を私たちが納得しうる」(95)、「貴美子が言っていることを僕が理解する」(96)ことが、足りないことなく十分できているさまを表す、その十分性に言及するものである。この類型の特徴は用例の多くが『分類語彙表』における認識動詞に偏っていることであり、「よく分からない」のように、動詞の否定形を伴う用例が844例のうち、318例(約37.7%)もある否定形の述語ととてもよく

呼応する類型ということである。工藤(1983)は「程度副詞は一般に…(用例省略)…否定形式とともに用いることは通常ない」と述べ、この類型も程度表示の用法と区別される特徴を持っているとみられる。そしてこの特徴は、情態表示の用法と程度表示の用法がもともとその特徴や使い分けを異にしていることの支えとなる。

また、認識動詞以外にも「見える、聞こえる」のように話者の意志と関係なく、感覚を通して入ってきた情報を十分認識しているかどうかをより効果的に表すものもある。そしてほとんどの用例が認識動詞に偏っているとはいえ、次のような用例も存在する。

97)　おはようユキ、よく眠ってたね。(竹内照菜(2004)『ずっと、夢を見ている』)

98)　悲しみによく耐えていると思いますよ。(帚木蓬生(2005)『エンブリオ』)」

97)と98)は述語は認識動詞ではないが、「十分眠る」、「十分耐える」というふうに、全て十分性という意味で捉えられる事柄であると思われる。

以上、第三類の十分性も充実性、確実性と共に「よく」の〈情態性〉が文の中で現れる具体的な意味であると言える。

しかし、三つの類型が〈情態性〉を表しているからといって、全く程度的に捉えられないかというと、そうではない。第一類の事柄ができているさまと第二類の情報の受け入れ方、そして第三類の認識の仕方は、それだけではなく、事柄のできている完成度が高いこと、受け入れた情報の量が多いということ、また認識した情報の量がどれくらいかということを表すことができ、程度的にも捉えられる事柄である。例えば、86)の「よく手入れされた庭」というのはまずはきれいに、美しく手入れされた庭という意味で捉えられるが、手入れされている程度の度合いが相当高いという、その完成度に関する意味としても捉えられる。88)の「よく調べる」というのは間違いのないように、しっかり調べることでもあり、多くの内容あるいは資料など、たくさんのことを調べることでもある。また、96)の「よく理解できた」のは十分解ったという意味でもあり、多くのことが理解できたという意味でもある。すなわち、情態表示の「よく」には、事態のあり方が充実・確実・十分な状態へ、といった変化の度合いが読み取れるのである。

したがって、三つの類型は〈情態性〉として充実性、確実性、十分性を表す、情態表示の用法であるといえる。ただし、それらの内容は目で見て度合いが観察でき、量的にとらえられるものでもあることから、その状態変化の程度について、ある基準値に達したという話者の判断が表出される。これは、「よく」が内包する〈評価性〉であって、「よく」が命題全体にかけて影響を及ぼし、聞き手に対する直接的な評価を表す評価表示用法の〈評価性〉が、

情態表示用法の中では述語動詞の特徴に対する話者の判断という形で現れるのである。そして、従来の研究で「よく」が程度表示の用法に捉えられた理由は、まさに状態変化の程度を示しているためであると考えられる。ただし、基本的には事態のあり方に言及するものであるため、程度的な特徴より〈情態性〉が優先して発揮され、典型的な程度副詞である「非常に」との入れ替えが不可能である。

以上、「よく」の情態表示の用法について考察を行い、事態のあり方に言及するものであるという、それなりの特徴を持っていることが明らかになった。またそれらは「よく」の連用形とも明らかに異なっている。とすると「動作作用または事態のあり方を表して、主として動詞を修飾する副詞」(日本国語大辞典第二版2002)である情態副詞のように、「よく」の情態表示の用法と見た方が妥当であると思われる。

5. まとめ

本章の考察結果を要約したものが次の表9である。

［表9］情態表示の「よく」の特徴

<table>
<tr><th>〈情態性〉の具体的な意味</th><th>述語の特徴</th><th>共通点</th></tr>
<tr><td>充実性</td><td>結果の状態を表す「－ラレ－」「－テアル－」「－テイル－」等の形式と共起しやすい。</td><td rowspan="3">述語が度合いを問うことのできる、また量的にとらえられるものであるため、状態の変化を有し、程度的に捉えられ〈評価性〉をもつ。ただし、事態のあり方を表すという〈情態性〉が優先するため、典型的な程度副詞とは置き換え不可。</td></tr>
<tr><td>確実性</td><td>視覚・聴覚・思考を表す動詞に偏っており、依頼・命令の形式との共起が目立つ。</td></tr>
<tr><td>十分性</td><td>認識動詞に偏っており、否定の形式と共起しやすい。</td></tr>
</table>

表9より、情態表示の「よく」というのは、修飾を受ける動詞の形式や意味との組み合わせによって、文の中で充実性、確実性、十分性といった具体的な意味に転義していくことがわかる。それは、単に事態のあり方を表すものではなく、述語の表す状態がいかに充実・確実・十分な状態へ変化しているのかという、状態の変化を有するものである。つまり、情態表示の「よく」は、状態変化を有する動詞述語とそれに対する程度的捉え方によって〈評価

性〉をもち、「よく」の意味特徴である〈情態性〉が現れるのである。

第5章　程度表示の「よく」

1.　本章の目的

本章では、「よく」の程度表示の用法に関して考察する。第2章のテストから、「よく」の程度表示の用法と認めたものは、述語の動詞を修飾し、典型的な程度副詞との置き換えが可能なものであった。この条件に該当する用例をもとに、構文的、意味的特徴を検討し、「よく」の表す〈程度性〉とは何かについて明らかにする。

2.　先行研究及び程度性の規定

第1章の2.1で記述したように、「よく」の用法に程度副詞としての用法があることについては、ほとんどの先行研究で取り上げている。しかし、前章の情態表示の用法に関しては、先行研究では全く触れていないか、あるいは情態表示と程度表示の用法とが共存しているというような記述が多かった。本章では情態表示の用法と区別され、典型的な程度副詞と違和感なく置き換えできる、まさに程度副詞のように機能する「よく」の程度表示の用法に関して考察を行う。

第 2 章の置き換えテストの結果、典型的な程度副詞との置き換えが可能であり、程度表示の用法であると規定した用例は、全 2041 例のうち 155 例であった。ここにもう一度用例を挙げる。

99)　顔かたちも、ルトヴィア人の母の血を色濃く継いだシャイハンとは違い、父によく/非常に(◯)似ていた。（須賀しのぶ(2002)『砂の覇王』）

100)　今日は朝からよく/非常に(◯)晴れていて、向かいの三宅島がはっきりと見える。（満坂太郎(2005)『海賊丸漂着異聞』）

99)、100)のような用例は、仁田(2002)のいう「属性(質)や状態を表す成分に係ってその程度性を修飾・限定する」程度副詞として機能しているように見える。意味的にも述語の表す「似ている」(99)、「晴れている」(100)状態の程度が高いという意味を加えていると考えられることから、ここではその意味を〈程度性〉とよび、程度表示の「よく」に関する考察を進める。

3.　研究方法と資料分析

資料は全用例のうち、程度表示の用例を挙げ研究を進めるが、数的には全2041例のうち、155例、約7.6%という、本稿で取り上げる「よく」の四つの用法のうち、最も少ない数の用法である。この数値は、従来「よく」の程度副詞的用法とみなされてきたものの中に、程度

副詞ではないものがはるかに多かったということであり、第4章で論述した情態表示の用法がそれにあたる。ここで取り扱う程度表示についても、程度を表現する機能、そして意味内容について検討が必要である。

第3章の表2にあるように、文体によって分けてみると、会話文に25例、地の文に130例で評価表示の用法以外の用法と同じように、地の文の方にはるかに多く使われていることがわかる。しかし、それは評価表示の「よく」のような話者の判断プロセスを必要とする表現ではないことに由来すると考えられるので、文体的な特徴をもたないものと理解できる。

なお、本章ではこの155例をもとに考察を進めるが、「よく」の特徴を際立たせるために、必要によって類義関係の程度副詞である「非常に」を研究対象に入れ[14]、比較・対照を試みる。

4. 程度表示の「よく」の特徴

先述したように程度表示の用法の「よく」は、典型的な程度副詞との置き換えが可能であるほど、程度副詞的に機能しているとみられる。そのため、程度副詞の規定を確認しておく。国語学大辞典(1980)によると、程度副詞は「状態性の意味を持つ語にかかって、その程度を限定する副詞。結びつく相手すなわち状態性の意味を持つ語は、品詞としてはいろいろなものにまたがる。まず基本的な用法として、形容詞・形容動詞と結びつく」と規定している。すなわち、程度副詞とは状態性の語の程度を限定するもので、被修飾語となる状態性の語はいろいろであるが、基本的には形容詞・形容動詞と結びつくと述べている。実際に典型的な程度副詞である「非常に」の用例を取り上げ確認すると、次のようである。

101) あなたは私を非常に誤解している。(大沢在昌(2003)『秋に墓標を』)

102) そしてまた、非常にきびしい牧師だとも聞いていた。(三浦綾子(2002)『道ありき』)

103) たしかに。矢作さんを脅そうとするなんて、 非常に愚かなことでしたよね。(恩田陸(2002)『不安な童話』)

104) 「あれはやはり弾劾すべき戦争だった。私は間違っていた」ということを非常にはっきりと表現して、だから「日本に二度と戦争はさせない。そのために力を尽くす」と言った。(加藤周一(1993)『居酒屋の加藤周一』)

[14] 但し、「よく」のように多義語ではないため、前後の文脈が要らず、期間が短くても数的には十分だと判断し、「KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言」を用いて 2000 年代に設定し検索を行った。その結果、外国人作家の翻訳作品や古典の現代語訳作品などを除いて 345 例得られたが、用例の多様性のため 1900 年代の用例も引いて本文に使った。

「非常に」は動詞(101)、形容詞(102)、形容動詞(103)といった、いろいろな品詞を修飾していることが分かる。それだけでなく、104)のように他の副詞も修飾することができる。他の程度副詞である「とても」の文を調べても同じである。これは、「非常に」や「とても」は主な機能が程度の高さを表す語であるため、程度的に捉えられる語であるなら、どの品詞でも自由に修飾できるのであると判断される。また、意味的にはそれぞれ「誤解している」(101)、「きびしい」(102)、「愚かな」(103)、「はっきり」した(104)程度が高いとの意味を表す。なお、典型的な程度副詞であるだけに、動詞より形容詞や形容動詞を修飾する用例が、全体的に多く現れ、全345例のうち260例(約75.4%)を占めていた。

それでは「よく」の場合はどうであろうか。

105)　よく澄んだ、深みのある声が、陽光を震わせてかけられた。(中里融司(2003)『星忍母艦テンブレイブ』)

106)　カーテンの隙間から外を眺めやると、どんよりと灰色の曇り空が続く英国には珍しく、気持ちのよいほどによく晴れた朝だった。(かわい有美子(2001)『水に映った月』)

107)　なのにアキの声はよく響き、寮の最上階まで響き渡る。(中里融司(2003)『星忍母艦テンブレイブ』)

108)　どれもよく似ていたが、ひとつの入口だけがほかよりもいくらか小さい。(向山貴彦(2001)『童話物語』)

109)　頭を短く刈り上げたボーイッシュな容姿に、その服がよく似合う。(田中光二(2001)『警視庁国際特捜隊』)

110)　地味目な色合いのスーツはタキシード姿の周りの男たちとは違って逆の意味でよく目立ち、美しく煌くダークブロンドの髪をいっそう引き立てて人目を引いた。(辻桐葉(2005)『英国紳士の野蛮なくちづけ』)

105)～110)のように、程度表示の「よく」は、動詞のみを修飾している。他の品詞を修飾する用例は見当たらなかった。特に程度副詞の基本的な機能である形容詞や形容動詞を修飾する用例は全く見つからなかった。これは程度表示の「よく」が程度副詞的な機能を果たしているものの、完全な程度副詞としては定着していないということである。

程度表示の「よく」は述語の特徴によって大きく二つに分けられる。被修飾語である動詞をアスペクトの観点から105)～110)の用例を分類してみると、105)～107)と108)～110)とに分けられる。そのうちまず105)～107)は、よく澄んだ結果、聞きやすく聞いていると気持ち良くなる声である(105)、天気がよく晴れた結果、気持ちがよくなる(106)、声がよく響いた

結果、寮の最上階まで響き渡る程度である(107)という意味合いが読み取れ、アスペクト的に状態変化の結果相を表しているといえる。それに対し、108)～110)は入り口がよく似ている(108)、その服がよく似合う(109)、地味目な色合いのスーツがよく目立つ(110)という、単なる状態を表すものである。程度を表している用例であるだけに、両方共通に状態性の述語であることは当然である。

さて、状態の程度が高いという意味を〈程度性〉とよぶことにした。ここでは程度表示の「よく」にみられる〈程度性〉に関してより詳しく考えるために、前章の情態表示の用法と比較して検討してみよう。105)から110)にみられる〈程度性〉は確かに「澄んだ」、「晴れた」、「響いた」、「似ていた」、「似合う」、「目立った」程度が高いことを表している。しかし、情態表示の「よく」は度合いを測れるような、量的にとらえられるものであるため、状態の変化を有し、程度的に捉えられるもので、どれくらいその状態になっているかに焦点が置かれている。それに対し、程度表示の「よく」にみられる〈程度性〉は度合いの最大値に近い、それ以外の状態は考慮に入れないというような意味合いが読み取れる。用例を挙げ考えてみよう。

111)　貴美子が言っていることは、僕にもよく理解できた。(井上夢人外(2005)『クラインの壺』)

112)　よく澄んだ、深みのある声が、陽光を震わせてかけられた。(中里融司(2003)『星忍母艦テンブレイブ』)

111)は「よく」の情態表示の用例、112)は程度表示の用例である。111)の「よく理解できた」は、どれくらいかが測れるようなもので、「理解する」という動詞の度合いが0から10まであるとすると、その幅のある地点にあることを意味しているように思われる。そのため「よく理解できた」の逆転した事態を想定すると「少し理解できた」になる。それに対し、112)の「よく澄んだ」にみられる〈程度性〉は、どれくらいかを問うよりは澄んでいるかいないかが問われるようなもので、度合いの最大値に近いということを意味しているように思われる。そのため、「よく澄んだ」の逆の事態は「少し澄んだ」ではなく、「あまり澄んでいない」が想定できる。他の用例をみても、どれくらい晴れたか、どれくらい響いたか、どれくらい似ているか、どれくらい似合うか、どれくらい目立つかではなく、晴れているかいないか、響いているかいないか、似ているかいないか、似合っているかいないか、目立っているかいないかが問われるものである。つまり情態表示の「よく」にみられる程度的な特徴と程度表示の「よく」にみられる〈程度性〉とは、修飾する述語との組み合わせによって、

変化の度合いを問うか度合いの高さを問うのかというような相違がみられるのである。

ただし、程度表示の「よく」が典型的な程度副詞との入れ替えが可能で、程度副詞的な機能を果たしているからといって、全く〈情態性〉を有していないかというと、そうではない。確認のために、105)～110)の用例に、典型的な程度副詞である「非常に」を入れた105)′～110)′で考えてみよう。

105)′非常に澄んだ、深みのある声が、陽光を震わせてかけられた。

106)′カーテンの隙間から外を眺めやると、どんよりと灰色の曇り空が続く英国には珍しく、気持ちのよいほどに非常に晴れた朝だった。

107)′なのにアキの声は非常に響き、寮の最上階まで響き渡る。

108)′どれも非常に似ていたが、ひとつの入口だけがほかよりもいくらか小さい。

109)′頭を短く刈り上げたボーイッシュな容姿に、その服が非常に似合う。

110)′地味目な色合いのスーツはタキシード姿の周りの男たちとは違って逆の意味で非常に目立ち、美しく煌くダークブロンドの髪をいっそう引き立てて人目を引いた。

典型的な程度副詞は単に程度の高さのみを表すものであった。そのため、「よく」の代わりに「非常に」を入れると、「澄んだ声」(105)′がどうかとは関係なく、どれくらい澄んでいるかという度合いの高さのみを述べる文になる。106)′～110)′も同じようにどれくらい晴れたか、どれくらい響いているか、どれくらい似ていたか、どれくらい似合うか、どれくらい目立つかに焦点があり、その度合いが普通以上に、相当高い状態になっているようすを客観的に表現し、特にその状態がどうであるかに関しては言及していない。それに対し、105)の用例「よく澄んだ」は、澄んでいるかいないかという問いに対して、澄んでおり、その度合いが最大値に近いという意味ではあるが、どのように澄んでいるかという問いに対する答えでもあって、澄む度合と澄み具合との両方を表していると思われる。それ以外の用例も、晴れる度合と晴れ具合、日焼けの度合と日焼け具合、似ている度合いと似た具合、似合う度合と似合い具合、目立つ度合いと目立ち具合という、その両方が捉えられ、これらは前述した情態表示の「よく」が程度的にも捉えられることと同じように、程度表示の「よく」も事態のあり方という〈情態性〉を有すると言える。ただし、〈程度性〉が〈情態性〉より優先して発揮されるため、程度表示の用法として働くと考えられる。

では次に、程度表示の「よく」についてより詳しく考察するために、上記の用例に「よく」の被修飾語の対義語を入れて考えてみよう。

105)″よく濁った(？)、深みのある声が、陽光を震わせてかけられた。

106)″カーテンの隙間から外を眺めやると、どんよりと灰色の曇り空が続く英国には珍しく、気持ちのよいほどによく曇った(？)朝だった。

108)″どれもよく違っていた(？)が、ひとつの入口だけがほかよりもいくらか小さい。

この三つのの用例はすべて、自然な文とはいいにくい。つまり、程度表示の「よく」は「よく」との相性がいい動詞の対義関係にある動詞とは、共起しにくいようである。105)～110)の「よく」の用例を少し広げて考えると、105)は声がほどよく澄んでいて、聞きやすく気持ちがよくなるというような含意があると思われる。106)は天気が良く晴れていて気持ちがよくなることを、107)はアキの声がよく響いて、寮の最上階まで響き渡るくらいであるという意味合いが読み取れる。また、108)は一つの入り口以外はどれも同じように見えるほど相当似ていることを、109)はボーイッシュな容姿とその服がほどよく似合うということを、110)は地味目な色合いのスーツが人目を引くくらい、とても目立っているという意味であって、程度表示の「よく」の用例は、単に最大値に近いという程度の高さだけではなく、その結果、丁度良い具合になっている、すなわち最大値に近いある地点を超えた結果が良いという、結果を取り立てる副詞であるといえる。そして程度が最大値に近い基準値に達したという話者の判断が加わり、これが〈評価性〉をもつ。

ここで気になるのは、結果を取り立てるという点で、情態表示の第一類である充実性の類型と似ているという点である。ここにもう一度用例を挙げる。

113)　大通りのよく整備された道、街路樹、歩道、西洋風建築の家、土蔵造りの商家、軍隊施設、各種の学校、各所の河岸市場などなど、篤にはすべて興味深いものであった。(松定ちよし(2001)『桃の木のトリック』)

114)　結露にうっすらと曇った窓ガラスの向こうには、よく手入れされた庭が見おろせ、その眺めもまず上等のホテル並みだった。(平石貴樹(2002)『笑ってジグソー、殺してパズル』)

情態表示の第一類113)、114)の用例も「整備されている」、「手入れされている」状態が充実していて結果が良いという、結果を取り立てるという点で程度表示の「よく」と共通している。この結果を取り立てるという特徴が、「よく」が程度副詞の基本的な機能である、形容詞・形容動詞を修飾できない理由を説明する。前述のように「よく」は状態動詞にかかって、変化の結果や状態が良いことを表す結果の副詞である。しかし、形容詞はモノやコト

の属性や状態を表すものであるため、変化の進行や結果を問うことの出来ない品詞である。「よく」の特徴が、なんらかの変化の結果に由来するものとすると、そもそも形容詞ではなく、動詞にかかるものであると言える。しかし、程度表示の「よく」が形容詞を修飾することは不可であるとしても、状態性の強い語つまり形容詞の性質に近い動詞にかかることは確かである。用例から考えると、105)は「声が澄んでいる」、106)は「天気が晴れている」、107)は「声が響いている」との意味で、これらの動詞は「りんごが赤い」という形容詞文の「赤い」のように対象の性質を表す、いわゆる属性形容詞に近い。それ以外にも「伸びる、しなる、光る、透ける、透き通る、太る、冷える、たわむ、熟れる」などがあり、いずれも対象の属性を表すものであることが確認される。

また(108)～(110)は、話し手が「入り口」、「その服」、「地味目な色合いのスーツ」について、それぞれ「似ている」、「似合う」、「目立つ」という気持ちを表している意味で、これらは「カバンがほしい」という形容詞文の「ほしい」のように、対象に対する人の感情を表す感情形容詞に似ている。このような例としては「似る(81例)、似合う(22例)、合う(9例)、目立つ(3例)、マッチする(2例)、馴れる(1例)、馴染む(1例)、映える(1例)、もてる(1例)」があげられる。なかでも用例数としては、「似る」と「似合う」を合わせた数が、程度表示の用例155例のうち103例、つまり7割弱を占めていることになる。さらにこのような用例は［AがBに述語］のような構文を取る動詞であって、程度を表す「よく」の述語になるものは意味的に、また語彙的に相当限られたものである。

このように、程度表示の「よく」の述語になるものは、形態的には動詞であるが、意味や機能的には形容詞に近い動詞で、「よく」の意味はそれとの関係によって決まり、「よく」はその結合の際に、〈程度性〉の結果を取り立てる程度副詞のようなものになるのである。結果を取り立てる機能を持つため、未実現の述語形式と共起しないのは当然のことであろう。

5.　まとめ

程度表示の「よく」は、基本的に状態性動詞にかかってその程度の高さを取り立てるものである。ただし、単に程度の高さのみを表すのではなく、状態変化の結果相及び結果継続の状態の動詞述語と、その度合いが最大値に近いこととの組み合わせが〈評価性〉をもち、結果を取り立てる副詞となり、程度表示の「よく」の意味特徴である〈程度性〉が表れるのである。

第6章　頻度表示の「よく」

1.　本章の目的

第2章では置き換えても頻度の意味が変わらないことを前提に、「よく」の類義語でありながら、典型的な頻度副詞である「しばしば」との置き換えテストを行い、2041例のうち、494例を「よく」の頻度表示の用法であると規定した。本章では494例をもとに、頻度表示の「よく」の特徴を明らかにしていくが、「よく」の特徴を際立たせるために、類義関係にあり、置き換えテストにも用いた「しばしば」を研究対象に入れ、比較・対照研究を試みる。

2.　先行研究と研究方法

「しばしば」を「よく」の比較対象としてとりあげたのは、ほとんどの辞書に「しばしば」が「よく」の類義語として挙げられているためである。例えば、次の国語辞典や類語辞典などによると、

『三省堂国語辞典』
普通に見聞きしてめずらしくないようす。「－ころぶ」。しばしば。「(世間には)－あることだ・－あるやつだ・－言われるように」

『角川類語新辞典』
何度も繰り替されるさま。その傾向がつよいさま。「－雨が降る/あることだ」「最近-物忘れをする」。しばしば、何度も、度々。

『日本語語感の辞典』
一度や二度でなく何度もある意味で、会話にも文章にも使われる日常の和語。「-乗り遅れる」「-質問する」…(中略)…頻度が相対的に多い場合に用いるため、物事によって回数に差が大きい。しばしば、度々、ちょいちょい、ちょくちょく。

というように、類義語として最初に提示される語である。しかし、辞書の記述だけでは「よく」と「しばしば」の意味や使い分けに関する具体的な相違は分かりにくい。また辞典に取り上げられている「よく」の用例に「しばしば」を置き換えると不自然な文になる例もあるのだが、そのような現象についての詳しい説明は見当たらない。多義語である「よく」に対し、「しばしば」は単義語であるということなどにも着目し、「しばしば」とは異なる「よく」の特徴を構文的・意味的観点から考察し、明らかにしていくことにする。

なお、先行研究の記述のうち、頻度表示の「よく」に関する記述の要点を以下にまとめる。

森田(1980)、近藤(1986)、飛田・浅田(1994)のうち、まず、森田(1980)は「よく」と「しばしば」を比較し、「「しばしば」が生起する事柄の頻度つまり〝動作性〟を問題としているのに対して、「よく」は〝しばしばそのようなことになる。そのようなことをする〟という状態や性質、つまり〝状態性〟を問題としている」と説明している。しかし、「よく」が状態性を問題としていることはわかるが、それを動作性、あるいは回数性を問題にしていないというふうに解釈してもいいのか、ということには疑問が生じる。また、近藤(1986)は森田(1980)を踏まえ、「頻度の「よく」は〈事象の回数の多さ〉を表すが、そこから、文全体が状態説明(属性表現)となるような用法へずれることもある」とし、「よく」が回数性の高い様子を表しているが、そこから文全体が状態説明の用法へずれる場合があると説明している。しかし、その理由や原因が何かに関する説明が不十分であると見られ、本稿ではそのような現象が起こる原因あるいは他の要素を探り出す必要があると判断し考察を進める。

そして、飛田・浅田(1994)は、「「よく」が動作にかかる場合には何度も繰り返す様子を表し、状態にかかる場合には一般的な傾向を表す」とし、「よく」と「しばしば」にかかる動詞を動作と状態に分けて考察している。しかし、二語とも「頻度や傾向が非常に高いために」、また「全体的な傾向として頻度が高いことを表す」のような表現を用いており、類義語としては受け入れられるとしても、「しばしば」と「よく」の弁別的特徴ははっきり示されていない。また取り上げている用例「おうわさは常々よく伺っております」は頻度表示ではなく、情態表示と見なされ、分類の適切さに疑問をもつ。

以上のことから、「しばしば」は「よく」と意味や用法の面で、類義語として挙げられるほどかなり近いこと、そしてそれは反復動作の回数と関係すること、また話者の焦点に相違がみられるということは明らかになっているものの、二語が用いられる文の意味的特徴や用法上の相違などは明らかになっていないことが確認される。本稿では用例の分析によって意味的特徴や用法を比較分析し、二語の相違点を明らかにしたうえで、「よく」の特徴を明確にしていくことをその目的とする。

なお、第2章のテストから「よく」の頻度表示の用法であると規定した用例は493例である。また比較対象とする「しばしば」の用例は「KOTONOHA現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言」を用いてメディアとジャンルを書籍の文学に絞り、期間は全期間(1971年～2008年)に設定して検索、収集を行った。ただし、外国人作家の翻訳作品や古典の現代語訳作品などを除き、その結果、372例が得られた。「よく」の493例と「しばしば」の372例をもとに研究を進める。

3.　資料分析

本節では「よく」と「しばしば」の用例を文体(会話文、地の文)、相互入れ替え可能の可否、「ものだ」との呼応といった三項目によって、比較分析する。

3.1　文体の確認

まず「よく」と「しばしば」が、会話文によく使われるか地の文によく使われるかという文体(文の種類による違い)について確認しておきたい。「よく」と「しばしば」の各用例を会話文と地の文に分類し、その割合を示したものが次の表10である。

［表10］「よく」と「しばしば」の文体別用例数

文　体	よく	しばしば
会話文	114(23.1%)	19(5.1%)
地の文	379(76.9%)	353(94.9%)
合　計	493(100%)	372(100%)

表10より、「しばしば」は約95%が口語に近い会話文より文章語である地の文の方に用いられており、これは田忠魁他編(1998)の「「しばしば」は「よく」の状態性の習慣・傾向の間隔を狭めた文章語」という指摘を裏付ける結果となる。「よく」については明確に口語であるとしてはいないが、この記述から「しばしば」は文章語であり、それに対し「よく」は口語であるという推測が可能であろう。しかし、「しばしば」の約5%にあたる19例が会話文に用いられている。これはどのような用例なのか。

115)　犯罪者は、しばしばぽろりと本音をしゃべってしまう。無意識のうちにね…。(今野敏(2003)『ST青の調査ファイル』)

116)　そのようだね。光圀がしばしば訪れたと書いてある。(丹地甫(2005)『ハマヒルガオ』

115)、116)は、 会話文に出てきた「しばしば」の用例であるが、文章語である「しばしば」が会話文に用いられたといって特に特徴的なものといえる用例ではない。ただし「しばしば」が文章語であるため、会話文よりは地の文の方に多く用いられるのである。

一方、「よく」は会話文より地の文に現れた例が多く、従来の研究に反する結果が出された。が、この結果だけで「よく」も文章語であるとするよりは、文章語にも口語にも自由に

使われる語であるとみるべきではないかと考える。つまり、頻度を表す「よく」は会話文と地の文という、文の種類には制約を受けない語であると言うことができる。

要するに、「よく」と「しばしば」が使い分けられる第一の相違は、文体から来ると考えられる。従って、ここからは二語が共通して多く使われた地の文の用例のみ(379＋353例)を研究対象に絞り、検討を進める。

3.2　入れ替え可否の確認

「よく」と「しばしば」は二語とも高頻度を表す語であるため、同じような場面で使われる場合が多い。しかし同じ場面で「よく」あるいは「しばしば」が使えない場合も必ず出てくると思われる。そのため、この節では「よく」と「しばしば」の各用例に、お互い入れ替えをした場合、自然な文になるかどうか[15]に関して確認する。地の文に現れた各用例を、一例ずつ確認した結果は次の表11の通りである。

［表11］「よく」と「しばしば」の入れ替え結果

入れ替え結果	よく	しばしば
自　然	360　(95.0%)	342　(96.9%)
不自然	19　(5.0%)	11　(3.1%)
合　計	379　(100%)	353　(100%)

表11は意味は若干変わってくるとしても、入れ替えた場合自然な文になるか否かに関して調べた結果で、二語とも、ほとんど自然な文になることが分かる。とすると、「よく」と「しばしば」の相違は構文上の特徴からくるというより、意味上の特徴に起因する面が大きいと認めることができる。また不自然となった「よく」の19例と「しばしば」の11例は、二語の特徴を端的に見せてくれる例ではないかと思われる。そのため、まず「よく」の19例を検討し、同じような特徴を持っているものを束ねて、三つの類型に分類してみた。その第一類は、次のようなものである。

117)　これは、いちばんよくとなえられる経文であります。(ののはらゆみ(2004)『貞心尼』)

[15]　自然な文になるかどうかについては、日本語母語話者の直感的な感覚によって判断してもらった。

第一類は19例のうち1例あり、入れ替えた場合不自然な文になる理由は、「よく」の前にある「いちばん」のためであると見られる。それは「いちばん」を削除して「しばしば」を入れると、自然な文になることからも確認できる。

117)′ これは、しばしば(○)となえられる経文であります。
117)″ これは、いちばんしばしば(？)となえられる経文であります。

また「いちばん」と「しばしば」のセットは、ネット検索やコーパス少納言から検索をしても一例も出てこなかった。これは「よく」が頻度副詞として定着して使われているといっても、頻度が高いという意味を表す典型的な頻度副詞とは異なる何かが存在するという裏付けになると思われる。面白いのは「とても・非常に・相当・かなり・最も・実に・極めて」などの、頻度副詞を強調する程度副詞の大半が「よく」とも「しばしば」とも自然に共起するのに対し、「いちばん」は「しばしば」と共起しにくいということである。さらに興味深いのは「いちばん」と意味的に類似している「最も」の場合は「しばしば」とも「よく」とも自由に使われるが、「いちばん」と「しばしば」の相性は悪いのである。これは「いちばん」という語の口語的特徴に起因する現象と見られ、「しばしば」が文章語であることがもう一度確認される根拠にもなると思われる。とすると、用例の少なさのため、断定はできないが、「しばしば」は前に置かれ頻度の意味を強調する副詞に多少制限があるが、「よく」はなく、それは前節で記した文体の差からくる特徴によるものであるとみられる。

次に第二類は、収集した用例の中には19例のうち1例あったが、1900年代の用例を付け加える。

118)　加寿子はよく地下の生命創出研究所を訪れるようになっていた。(半村良(2001)『ガイア伝説』)
119)　外山は研修生から面倒な質問を受けると、よく彼の部屋へ連れていく例になっていた。(新田次郎(1969)『孤高の人』)
120)　名は書いてなくても、自分宛にもなっていると思うと、勝手によく開封する細君はその手紙をすぐ開封した。(志賀直哉(1920)『小僧の神様』)

以上の用例が「しばしば」と置き換えると不自然な文になる理由は、文中の他の要素に起因すると判断される。他の要素とは「訪れるようになっていた」、「例になっていた」、「自分宛にもなっていると思うと」のような部分であって、「よく」が一回性の事柄ではな

く、複数回に行っている意味を表す表現とセットになると、単なる回数を問題とするのではなく、同じようなことを何度も繰り返している意味を表していて、過去のある時点から習慣的に行われてきたことを意味する。このような類いは文の前後に、あるいは文脈の前後に、頻繁に行っているという意味合いの要素があり、「よく」の代わりに「しばしば」を入れると、その意味が欠落するのである。これは、「しばしば」が単に高頻度で繰り返される事柄を表すのに対し、「よく」は事柄が高頻度で繰り返されることにより累積し、習慣的になる可能性を持っている語であることを表している。となると、「よく」は「しばしば」には見られない、事柄の累積と習慣性とに深く関連しているとみられ、この点は「よく」の意味特徴を明らかにするための重要な根拠になると考えられる。

最後に第三類は19例のうち17例に該当し、ここに用例を挙げる。

121)　美都子はよく笑う女性であった。そしてよくしゃべる女性であった。(丹波五郎(2005)『熱帯雨林』)

122)　神経質でよく吠える犬なんだ。(清水義範(2003)『日本語の乱れ』)

123)　バルザックは女性読者に人気があったと一種伝説的にいわれるが、『谷間の百合』の場合、批評家の酷評にもかかわらず本がよく売れ、そして女性読者からとりわけ熱心な反応があったことが事実として明らかにされている。(野崎歓(2001)『フランス小説の扉』)

以上の用例は、頻度表示の「よく」の典型的な用例とは若干異なって、回数が多くなるにつれ、その量も多くなるものである。用例からみると、121)～123)の笑う回数、吠える回数、売れる回数が多いことは笑う量、吠える量、売れる量が多くなることを表し、結局それぞれの性格や傾向を表すことになる。121)の「よく笑う女性」というのは、単に笑う回数が多いことを表すのではなく彼女の性格を説明してくれるのである。122)は犬の性向を、123)は本が売れる傾向を意味する。このような用例は「よく」の代わりに「しばしば」を入れると、不自然な文ではないが、ヒトの性格や事態の傾向などを表す意味が薄くなってしまい、森田(1980)の言う「頻度の「よく」は〈事象の回数の多さ〉を表すが、そこから、文全体が状態説明(属性表現)となるような用法へずれることもある」という主張を最もよく裏付ける用例であると思われる。

それに対し、「よく」と入れ替え不可能な「しばしば」の11例は少し異なる様相を呈する。11例もさらに8例と3例に大きく分かれたが、まず8例に当たるものは次のようなものである。

124)　そのミスを防ごうとメモをとる癖をつけたが、メモをしたことを忘れてしまうことも<u>しばしば</u>だった。(横山秀夫(2002)『半落ち』)

125)　これはクライバーの指揮以下、声楽家も入れて、すべての音楽家たちの統率のとれた見事な演奏にくらべて、邪魔とまでいう気はないが、しかし、<u>しばしば</u>目障りであった。(吉田秀和(2000)『時の流れのなかで』)

「しばしば」は124)のように「タ」を用いて述語になり得る。また、125)のように名詞述語を修飾する機能もある。それに対し「よく」は動詞しか修飾しないため、このような用例は「よく」との置き換えが不可能である。

次に、11例のうち3例を取り上げる。

126)　<u>しばしば</u>、夜、フェルヴァック邸の広い中邸を横切るときなどは、自分にわけをいいきかせるようにして、やっと絶望の一歩手前でふみとどまっているというありさまだった。(村上春樹(1985)『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』)

127)　放課後、運動場で行われる野球部の練習を<u>しばしば</u>見るうち、あの時のバット若者が、チームの四番打者で、守備位置がセンターであることを七瀬は知った。(筒井康隆(1977)『エディプスの恋人』)

128)　彼が学生について語るのを聴いていると、<u>しばしば</u>敵意さえ感じられた。(藤原正彦(1977)『若き数学者のアメリカ』)

126)～128)の用例は、「しばしば」の代わりに「よく」を入れると、どこか安定していない文になる。それは全て一定の時間枠を持っていることと関連しているのではないか。例えば、126)は「夜、フェルヴァック邸の広い中邸を横切るとき」、127)は「放課後」、128)は「彼が学生について語るのを聴いている(とき)」というような時間的尺度が付いているのである。ところが、この時間的尺度というのは、文脈の流れや事前知識による場合もあり、あるいは非常に広い場合もあるため、絶対的に文に表示されるわけではない。しかし、それは表面化していないだけであって、「しばしば」の文は必ず時間的尺度を持つ。そのため「よく」と入れ替え不可能な「しばしば」の用例は、その時間枠の中での〈回数の多さ〉を表している。この類いは上記の「よく」の第二類と対比されるものとして、習慣的に行われてきたことではなく、時間枠の中で何回か行われたことを表すものである。例えば、127)は「放課後、運動場で野球部の練習が行われる」場面を見たことが何回かあったことを表すもので、習慣的に行う事柄ではない。このような点は「よく」とは異なる「しばしば」の特徴である

と見られる。

要するに、入れ替え不可能の用例から確認した「よく」の特徴は、まず「しばしば」はその前に置かれ頻度の意味を強調する副詞に若干制限があるが、「よく」にはなく、常に行う習慣的な事柄を表す要素とセットになると、「しばしば」との入れ替えが不自然となる。そしてそれは「よく」の意味特徴を探る重要なポイントになると思われる。また、回数の多さが量の多さを表す用例の中での「よく」は、ヒトや事態の性格あるいは傾向などを表すことができ、「しばしば」との置き換えが不自然であることが確認された。さらに、「しばしば」は述語になり得ることや名詞を修飾するなど、文の中で「よく」には見られない役割をしており、時間枠を持っていることが確認され、この結果は「よく」との相違を明確にする根拠になる。

3.3　「ものだ」との呼応

この節では、「～ものだ」との呼応について検討を行う。特に文末に「～ものだ」を伴う用例が目立ち、考察を行ったところ、「よく」と「しばしば」は、それぞれ23例(約5.8%)と3例(約0.8%)現れた。両方とも全体の数からするとそれほど大きな割合を占めてはいないが、「よく」の方が若干「～ものだ」を伴いやすいと言える。「～ものだ」はグループ・ジャマシイ(1998)によると、「過去において習慣的に行われていたことを、感慨をこめて回想するのに用いる」との説明があり、一般的に頻度副詞を伴って用いられる。そのため、高頻度を表す「よく」と「しばしば」の用例の中に多数含まれていたと思われる。次に「しばしば」と「よく」が「～ものだ」を伴う用例をみていく。

129)　ただそれに比例して彼の日常生活は不規則になり、しばしば食事時間を狂わせて彼の妻や母親を嘆かせたものである。(曠野信太郎(2001)『榎の里』)

130)　しかし中杉にそんな心根があるはずもなく、我々はしばしば彼の不愉快な演説に付き合わざるを得なかったもんじゃ。(三津田信三(2002)『作者不詳』)

131)　私は年じゅう、東京青山のワンルームの仕事場で起居していて、ほとんど明子とは別居の状態で過ごしていたから、東林間や相模大野の変わりようについては、しばしば、明子から聞いたものであった。(古山高麗雄(2002)『妻の部屋』)

132)　喧嘩はいけません、みんなと仲良くしましょうと、子供のときはよく言われたものである。(有吉玉青(2004)『がんばらなくても大丈夫』)

133)　子供の頃、よくここに通ったものだったな、とビオレッタは思った。(井上尚登(2002)『C.h.e』)

134)　本好きの鉄男は、図書館で本を借りては、よくこの公園のベンチで読みふけったものである。(岡靖則(2002)『ザホームレス！大逆転』)

129)～131)の「しばしば」の用例から検討してみよう。「しばしば」が「～ものだ」を伴うと、行為・作用の回数の多さを数えるのに焦点が置かれているのではないかと考えられる。129)は「食事時間を狂わせて彼の妻や母親を嘆かせた」こと、130)は「彼の不愉快な演説に付き合った」こと、131)は「東林間や相模大野の変わりようについて、明子から聞いた」ことが、普段より高頻度で起こったことを淡々と説明している意味で、いずれも同じ事柄が反復している様子を意味している。一方、132)～134)の例においては、「よく」が「～ものだ」を伴う例で、単なる動作の回数を問題とし、それをカウントしているより、同じ動作・作用が複数回積み重なって累積している様子を表しているとみられる。132)の用例では、「言われた」回数に重点があると言うより、「言われた」こと自体が幾度もあって、重なり積っていることを表している。同じように133)は「子供の頃ここに通った」こと、134)は「本を読みふけった」ことという事態が何回起こったかに焦点があるより、同じ事柄が過去から積み重なっている様子を表していて、全体的に過去このようなことがあったのだ、というような意味合いの文になる。ただし、ここで「～ものだ」は、前述のように感慨を込めて回想している意味を加える程度で、「～ものだ」が特に二語の意味的特徴と関係があるとは見られない。したがって、「～ものだ」との呼応度からすると、「よく」の方が若干「…ものだ」を伴いやすいといえる。しかし、それは「…ものだ」と「よく」との意味的関連性がみられるとは限らない。そのため、「…ものだ」を伴わない用例にも事柄の累積という特徴が現れるかを確認する必要がある。

3.4　まとめ

以上、頻度表示の「よく」の特徴を明らかにするために、「しばしば」と文体・入れ替えテスト・「ものだ」との呼応度という観点から比較検討を行った。その結果「よく」は、「しばしば」が文章語的であるのに対し、文章語・口語を問わず、自由に使われることが明らかになった。そして「しばしば」が「いちばん」の修飾を受けられないのに対し、「よく」は修飾を受ける副詞の制限がなかった。最後に「ものだ」との共起率を調べた結果、「しばしば」に比べ「よく」の方が若干共起しやすく表れた。しかし、これまでの検討では、どうしても二語の相違がはっきりしてこない。そのため、これまでの展開に基づいて二語の意味的特徴を明らかにしていく。

4.「よく」と「しばしば」の特徴

この節では「よく」と「しばしば」の意味的相違を明らかにするため、副詞の第一の機能である用言の限定に基づき、「よく」と「しばしば」が限定する動詞の性質との関係を検討し考察を行う。動詞の分類は、動作を表す動詞(「する」系)と状態を表す動詞(「なる」系)、存在を表す動詞(ある、いる)、知覚を表す動詞(「見る、聞く」など)と大きく四つに分けて検討していくことにする。次の表12が、用例のそれぞれの分布を示したものである。

［表12］「よく」と「しばしば」が限定する動詞群の用例数

動詞群	よく	しばしば
動作動詞	176　(46.4%)	125　(35.4%)
状態動詞	76　(20.1%)	108　(30.6%)
存在動詞	73　(19.3%)	63　(17.8%)
知覚動詞	54　(14.2%)	57　(16.2%)
計	379　(100%)	353　(100%)

表12より、「よく」と「しばしば」二語とも動作動詞にかかる用例が最も多く、存在動詞や知覚動詞とかかる用例も少なくないことが分かる。ところが、「よく」にかかる動作動詞と状態動詞の差が2倍以上であるのに対して、「しばしば」は動作動詞の方が少し多いほどで、圧倒的な差が見て取れるものではない。とすると、「よく」と「しばしば」が修飾する動詞はいろいろな動詞にまたがるが、「しばしば」に比べ「よく」の方が多少動作動詞を好んで修飾すると言える。それでは、「よく」と「しばしば」が四つの動詞群と共起する場合の意味的特徴を探っていくことにする。

4.1　「よく」文の特徴

まず、「よく」が動作動詞、状態動詞、存在を表す動詞、そして知覚動詞にかかる用例を検討し、それぞれの特徴について検討する。

135)　佐太郎は魚半によくくる客である。(南原幹雄(2005)『箱崎別れ船』)

136)　野口冨士男は荷風を倣うかのように実によく東京の町を歩いている。(川本三郎(2001)『東京残影』)

137)　ブライトは、自分がよく間違えられる、ひとつ年上のリチャード・ウェルザーという、他寮の代表を知っていた。(かわい有美子(2001)『水に映った月』)

138)　人に頼って生きてるから気が張ってないのか、紀良は本当によく風邪をひいた。（横森理香(2004)『ワルツ』）

139)　修正液などを持っていなかった子供の頃、ぼくもよくこうやって、他人に見られたくない文字を消したことがあった。（霧舎巧(2005)『ラグナロク洞』）

140)　よく給食に出る献立に、クリームシチュウがあった。（平岩弓枝(2002)『極楽とんぼの飛んだ道』）

141)　岡田の母親はこの家に遊びに来るたびに、よく目にしていたが、一度としてあんな表情を見たことはない。（金田えびな(2001)『恋人の値段』）

142)　虎之助の不安が的中したかのように近年、忠直についてのわるい噂をよくきくようになった。（南原幹雄(2004)『御三家の反逆』）

135)、136)は「よく」が動作動詞を限定する用例、137)、138)は状態動詞、139)、140)は存在動詞、141)、142)は知覚動詞を限定する用例である。全ての用例は高頻度を表すという点でまず共通している。「よく＋動作動詞」の組み合わせである135)、136)は「魚半にくる」、「東京の町を歩いている」動作の回数が多い様子を表し、「よく＋状態動詞」の組み合わせである137)、138)は「間違えられる」、「風邪をひいた」状態になる回数が多いことを、また「よく＋存在動詞」の組み合わせである139)、140)は「文字を消した」、「献立にクリームシチューがある」回数が多いという意味であり、「よく＋知覚動詞」の組み合わせである141)、142)は「岡田の母親を目にしている」、「わるい噂を聞く」回数が多いことを表す。このように「よく」はかなり高頻度で繰り返されている事柄を表す語である。ただし、話者はその頻繁さ、回数性を全く問題にしないとは言えないが、特に注目せず漠然と高頻度で起きたというふうに表現する。例えば135)は「佐太郎が魚半にくる」回数が多いという意味ではあるが、どれくらい多いかあるいは何回きたかなどに関しては特に注目しない。それは動作動詞、状態動詞、存在を表す動詞、知覚動詞と関係なく同じように表現され、意味的にもそれほど大きな差は見られない。しかし、用例のうち存在を表す動詞文の中に、139)、140)の「よく」の文と少し異なる様相を呈する用例が見られる。

143)　世界中に自分だけ一人ぼっちで残されたような感じがすることが子供時代にはよくあるが、あの日も私はそんな気分になっていた。（小池真理子(2002)『夢のかたみ』）

144)　会社を引退した男によくいるでしょう、「俺はあの企業で、こんな大きな仕事をやってきた」みたいなことをいう人が。（渡辺淳一(2005)『懲りない男と反省しない女』）

145)　こうした民意と政策の乖離はよくある現象で、高速道路、整備新幹線、ダム建設、

赤字国債、海外派兵、多国籍軍加盟、改憲論議、年金問題、多くは似たような構造だ。（石黒耀(2004)『震災列島』）

146）　これが起承転結の「承」だが、これまた、よくある話である。（若桜木虔(2002)『作家デビュー完全必勝講座』）

このような用例は、非常に高い頻度で繰り返されている事柄を、話者がその頻繁さ、回数性には特に注目せず表現するという点では「よく」の他の用例と変わらない。しかし、頻度表示の用法ではあるものの回数を問題としないという点で、上記の139)、140)の用例とは異なっており、頻度の度合いは135)～142)の用例に比べ非常に高い。このような相違は、時間枠があるかないかによって現れるものではないかと思われる。一般的な「よく＋存在動詞」の場合は、139)の「修正液を持っていなかった子供の頃」のように、特定の時間枠があり、その中での事柄の反復を表している。それに対し、143)～146)の用例は特定の時間枠を持たない文で、開放された時間の中で不特定多数によって、一回ずつ起こった事柄が複数回積み重なったものであって、意味的には特別なことでも、珍しいことでもない、ごく一般的なことである。すなわち、「しばしば」の文が必須でとる時間枠を、「よく」の文は必須でとるわけではないが、とるかとらないかによって「よく」の意味が異なって見えるのである。このような特徴は、「しばしばある」には見られないものとして、「しばしば」と区別される、「よく」ならではの特徴をうまく見せてくれる用例であると見られる。またこれらは、ほとんど「よく」と「ある」がくっついている「よくある」の形で一つの語のように使われる。一方、「よくある」の文と同じようなパターンとして使われるものとして、「よく＋見る、聞く」のような、いわゆる知覚動詞との組み合わせによる例があげられる。

147）　ロシア人は無表情だとよく聞くが、少なくともこの本の中では明るかった。（朝生みお(2003)『君に逢える日まで』）

148）　正面ホールには大きなモニターがあり、白い服を着た、よくテレビで見るようないかにも博士風というおじいさんがうつっていた。（はばしげる(2004)『空とぶじゅうたん、なぞの計画』）

「よく＋知覚動詞」の文は大きく二つに分けられ、一つは上記の141)、142)のように、単なる回数の多さを表すものであり、もう一つは、147)、148)のように非常に一般的な様子を表すものである。そのうち、後者は知覚動詞の68例のうち14例を占めている。それらは「よくある」の文とよく似ており、時間枠をとくに持たない、ごく一般的かつ普通のことを意味し

ているものである。「よく＋ある」と同じように非常に融合度が進み、多くの用例が147)のように「よく＋知覚動詞」の形で表されている。

このように、143)～148)の用例は頻度を表す普通の副詞とは少し異なる様相を呈する。それはもともと頻度という概念が、動作の累積を問題とするものであるから、時間との関わりが深いのである。しかし、「しばしば」が時間枠の中での動作を表すのと違って、「よく」において時間枠というのは必須ではない。そのため、135)～142)のような用例は、時間の流れの中での動作の累積を表しているのに対し、143)～146)のような用例は、存在を表す「ある」がアスペクトから解放されている状態動詞であるため、時間とは関係なく表出されたものであると見られる。したがって、頻度が高いというのは時間が経つにつれて回数も多くなるということであるが、143)～146)のような用例は、状態動詞との組み合わせによって、時間の進行がなくなってしまい、累積だけが残ってしまったものだと言えるだろう。また147)、148)の「よく＋聞く」や「よく＋見る」のような用例は、状態動詞との組み合わせではないが、時間の流れとは関係ないごく一般的な意味を表していて、文自体が状態化してしまい、「よく＋ある」の文と同じように事柄の累積のみが残っている用例であると言える。このことから、事柄の累積というのは「よく」の意味を成す重要な要素であることが確認できる。また事柄の累積は、同じ動作の反復であるため習慣になる可能性を持っている。本章の3.2で見た「しばしば」との入れ替えが不自然な用例第二類と第三類は、事柄の累積が習慣にまで至った用例であろう。習慣とは動作の反復によって出来上がった動作の代表的な有り様であるから、「よく」の事柄は累積によって習慣になり得る可能性を持っている。

「よく」の四つの動詞群との共起例を検討した結果、「よく」の文中には全く回数を問題としないが、頻度の度合いは他の用例より非常に高い存在動詞の用例があり、それと似ている知覚動詞の用例もあることが確認され、それは時間枠との関係によって生ずることが明確になった。そして頻度表示の「よく」は単なる事柄の反復ではなく、反復動作の累積であることも明らかになった。

4.2　「しばしば」文の特徴

次に、「しばしば」が動作動詞、状態動詞、存在を表す動詞、知覚動詞にかかる文を検討するため、次の8例をみていく。

149)　証言によれば、貞子夫人はしばしば帝劇へ足を運んでいたという。(高野正雄(2002)『喜劇の殿様』)

150)　かれらはしばしば休息をとったが、体を動かさないでいると汗にぬれた肌に冷気が

一層強く感じられた。（吉村昭(2000)『北天の星』）

151）　それが、スーパーで独り買物をしている最中は、しばしば、貴船の笑顔が頭に浮かんだ。（清涼院流水(2000)『トップラン』）

152）　ハイチ神聖精霊連邦産の魔薬にはしばしば不純物が混じっていて、常習者百人に一人の割合で中毒死、そのまた十人に一人の割合で 飛屍化する。（吉川良太郎(2004)『ギャングスターウォーカーズ』）

153）　それにしても、由佳は母親のことが分からない―と思うことがしばしばあった。（内田康夫(2003)『伊香保殺人事件』）

154）　お蘭はかつて男に奉仕する時、しばしば、 多くの恥らいを以て厭々ながらのことがあったが、一十郎は激しい悦びと、多少の恥らいも以てこれを遂行した。（南條範夫(2003)『一十郎とお蘭さま』）

155）　着ているスーツにしても、ビジネススタイルの活動的なデザインで、東京の丸の内界隈のオフィス街でも、しばしば見かけるファッションだった。（和久峻三(2005)『京都奥嵯峨柚子の里殺人事件』）

156)「無足人」ということについては 松尾甚七郎の説明で興味が 索然としたと見えて、もうあまり聞かなかったが、伊賀の特産忍びの者については、彼はしばしば聞く。（山田風太郎(2002)『剣鬼喇嘛仏』）

149)、150)は、「しばしば」が動作動詞を限定する場合、151)、152)は状態動詞、153)、154)は存在を表す動詞、155)、156)は知覚動詞を限定する場合の用例である。前述したように「しばしば」の文は事態が何回起きたかということに焦点が置かれ、一定の時間枠の中で起こった事態の回数が普段より多いことを表す語である。「よく」が時間枠から解放された文の中で、その頻度の度合いが他のものより非常に高くなるのに対し、「しばしば」の文は常に時間枠を要求するため、使われる文によって頻度の度合いが異なってくるという特徴は見られない。「しばしば＋動作動詞」の組み合わせである149)と150)は、それぞれ「足を運んでいた」、「休息をとった」動作が多い様子を表し、「しばしば＋状態動詞」の組み合わせである151)、152)は「貴船の笑顔が頭に浮かんだ」、「不純物が混じっている」状態になることが多いことを、また「しばしば＋存在動詞」の組み合わせである153)、154)は「由佳は母親のことが分からない―と思うこと」、「多くの恥らいを以て厭々ながらのこと」が数回あることを表す。また、「しばしば＋知覚動詞」の組み合わせである155)、156)は「見かける」、「聞く」回数が多いことを意味する。

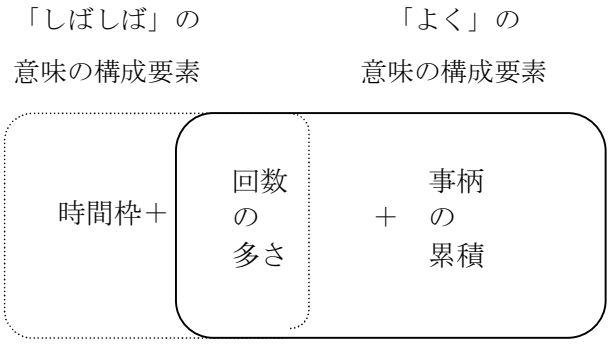
「しばしば」は、限定する動詞の特徴と関係なく、時間枠の中での高頻度という同じ意味

を表しているのに対し、「よく」は時間枠を持つか持たないかによって、持たない場合の頻度の度合いがより高くなり、結局一般的な事柄を表すことになる。この点は二語の意味の構成要素と深く関係している現象なのではないかと考えられる。これまでの検討を中心に「よく」と「しばしば」の意味特徴を明かにしていく。

4.3　「よく」と「しばしば」の意味の構成要素と事柄の現れ方

これまでの展開を通して「よく」と「しばしば」は、意味の構成要素がそれぞれ異なっていることが確認された。

まず、「しばしば」は一定の時間枠の中で起こった事柄の回数の多さを表す語である。それに対し、「よく」は事柄の累積性を表す語であって、「しばしば」とは回数の多さという観点からは共通している。第3章での入れ替えテストの結果が可能の方が圧倒的に多く出された理由は、次の図1で示したように、二語が意味的に共通している構成要素を持っているからであると思われる。



［図1］「よく」と「しばしば」の意味関係

しかし、「よく」には「しばしば」には見られない累積性という特徴が見られる。前述の135)～142)の用例は回数の累積性が積極的に働いた用例であり、回数の累積性は習慣になる可能性を持っているため、事態の習慣化まで発展したのが118)～120)に当る用例である。頻度表示の「よく」の習慣になる可能性は前述のように、限定する動詞の特徴や文の他の成分などによって具体的に表れ得る。さらに事態の習慣化が社会的に受け入れられ、一般化にまで発展したのが143)～146)の用例に該当するものであろう。さらに「よくある」の用例の中には一般化の故、「よくあることだよ。気にしない気にしない。大丈夫だよ。(作例)」のように気にする必要がないくらい普通であること、あるいは「よくあることじゃん。全然興味ねえ。(作例)」のように関心をひかないくらい平凡であるという意味にまで拡張しているも

のがある。これは事態の累積はめずらしさを下げるという、「よく」が回数の累積性と直結していることを表すものである。

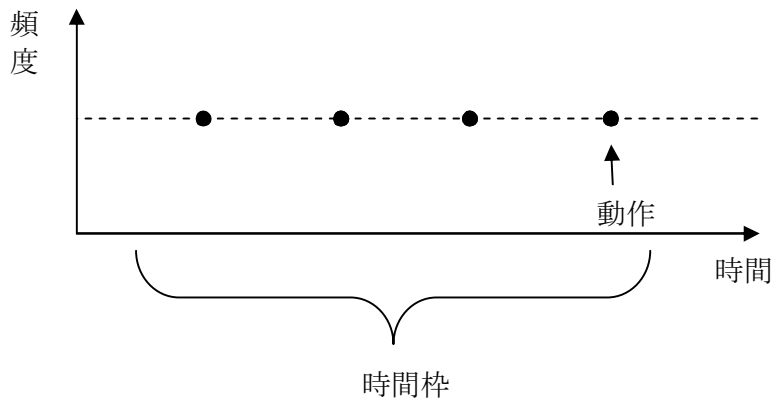
それでは、これまでの結果を踏まえたうえで、「よく」と「しばしば」の文の中で、事柄がどのように現れるかに着目して、次の3例からみていきたい。

157)　二月に入ってもなおしばしば強風が吹きつのり、火の用心の緊張の続く日々に誰もがうんざりしていた。(中津文彦(2002)『塙保己一推理帖』)

158)　昔は師走に入れば雪に埋もれたというが、近年は正月がきても積雪をみないことがしばしばであるらしい。(笹倉明(2001)『新・雪国』)

159)　恵理は心配事を抱えると、 しばしばこういう遠回しの伝え方をするのだった。(中村邦生(2004)『月の川を渡る』)

「しばしば」は数回起こったこと、つまり事態の回数に焦点があって、一定の時間枠の中で生じた事態の回数が普段より多いことを表す機能をする。157)は一定の時点以後「強風が吹きつのった」事柄の回数が幾度かあって、それが普段より多いことを意味しており、158)は相当広い時間枠の中で「積雪をみないことが」多いことを、また159)は「心配事を抱えると」という心理的な時間枠の中で、「遠回しの伝え方をする」ことが数回起こった様子を表している。次の図2は「しばしば」の事柄の現れ方を図に表したものである。



［図2］「しばしば」の事柄の現れ方

「しばしば」の事柄は、限定された時間枠の中で同じ動作が数回起こったことを表している。「しばしば」の事柄は高頻度を表し、話者がその回数の多さを意識している語であるため、事柄が頻繁に起きたこと以外の意味は含まれない。なお、「しばしば」は事柄自体に焦

点が置かれ、実際に起きた事柄という情報に依存し説明する語であるため、話者の評価は示さない。それに対し、「よく」は「しばしば」と同じように、事柄の回数性を要求するものの、それをカウントすることに焦点が置かれるのではなく、今まで累積してきた経験や情報が多いことに焦点が置かれている。そのため、「よく」の文において「しばしば」が取る時間枠というのは必須のものではないものになる。

160)　彼女はそのサイトによくアクセスしていた。(緋色煌二(2001)『誘惑』)

161)　猫がよくそうするのを見て、一度やってみたいと思っていたのであろう。(三島由紀夫(2004)『文学的人生論』)

162)　よく「あの人はファッションのセンスがある」と言われる人がいます。(ピーコ(2002)『片目を失って見えてきたもの』)

以上のように「よく」の文には時間枠がある場合もあり、ない場合もある。160)は特定期間中に「サイトにアクセスした」ことが多かったことを、161)は広い時間枠の中で「猫がそうした」ことが多かったことを、162)は特に時間枠は示されていないが、「～と言われる」回数が多いことを表していて、「よく」の話者はその回数を特に意識せず、今までの経験の積み重ねに即して漠然と多いという様子を表す。以下、「よく」の事柄の現れ方を図に示す。

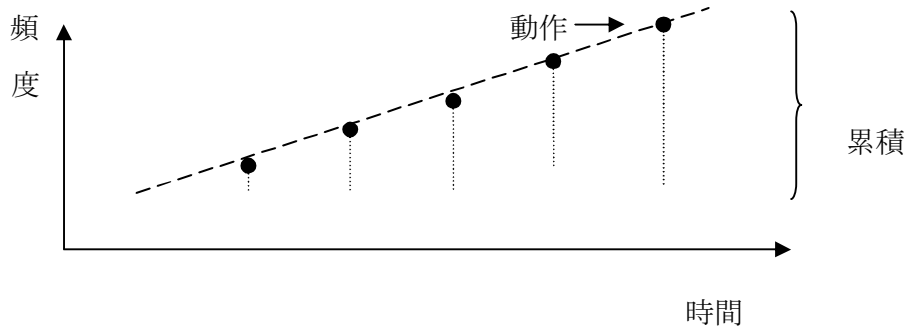


図3「よく」の事柄の現れ方

「よく」は「しばしば」とは異なって、開いている時間軸の上で同じ動作が起こるにつれて、前の動作の上に累積していくことを表す。そのため、「しばしば」が事態の回数を数えて線上に表すことができるとすれば、「よく」は加算して上方に築き上げていく表し方になる。回数のカウントという観点からいうと、「よく」の話者は回数そのものに関しては無意識的、「しばしば」の話者は意識的であると言える。また、「しばしば」の話者が前例をもとに発言するとしたら、「よく」の話者は今まで累積してきた個人的経験、あるいは頭の中

に蓄積された記憶・情報に依存している語である。本章の3.3で確認した、「よく」が「ものだ」を伴いやすいのも、「よく」が現在の記憶に基づいて表す語であるためであると考えられる。それは「よく」を以て未来の事柄を言うと、不自然な文になることからも確認できる。例えば

163)　また、労使の信頼を回復をするための懇談会をこれからしばしば開催をして、懇談会を通じて信頼を回復したいということ、(後略)。(安恒良一君(1986)『国会会議録第104回国会』)

とは言っても、

163)′～懇談会をこれからよく開催をして(？)、懇談会を通じて信頼を回復したいということ、

とは言わない。どう見ても違和感を感じる文になる。

なお、「よく」は個人の記憶に依存して発話をするため、「しばしば」とは異なる特徴を持っている。用例から考えてみよう。

164)　〈メランコリー〉の文脈では、〈青〉はしばしば〈黒〉と等価値を持つ。(入子文子(2004)『ホーソーン・《緋文字》・タペストリー』

164)′〈メランコリー〉の文脈では、〈青〉はよく〈黒〉と等価値を持つ。

165)　ハイチ神聖精霊連邦産の魔薬にはしばしば不純物が混じっていて、常習者百人に一人の割合で中毒死、そのまた十人に一人の割合で 飛屍化する。(吉川良太郎(2004)『ギャングスターウォーカーズ』)

165)′ハイチ神聖精霊連邦産の魔薬にはよく不純物が混じっていて、常習者百人に一人の割合で中毒死、そのまた十人に一人の割合で 飛屍化する。

166)　私は自分の心の乱れからお前たちの母上をしばしば泣かせたり淋しがらせたりした。(有島武郎(2004)『小さき者へ;生れ出ずる悩み』)

166)′私は自分の心の乱れからお前たちの母上をよく泣かせたり淋しがらせたりした。

167)　その附近でも霧は濃く、かれらはしばしば立往生した。(吉村昭(2000)『北天の星』)

167)′その附近でも霧は濃く、かれらはよく立往生した。

以上は「しばしば」の用例に「よく」を入れ替えたものであるが、まず「しばしば」の用例164)は「〈メランコリー〉の文脈で、〈青〉が〈黒〉と等価値を持つ」ことがあるという意味で、「しばしば」の場合は事柄が成り立つ場合が多い、しかし「そうでない」こともあり得るという、話者が逆の可能性を想定している場合に用いられるとみられる。先述したように「しばしば」は実際に起こったことに頼り、事柄を事実に即して捉える語であるため、事柄が成り立つ場合と成り立たない場合のうち、成り立つ場合の方が多かったとの意味合いがあるとみられる。それに対し、164)′の話者は「〈青〉が〈黒〉と等価値を持つ」場合が多いことに注目していて「そうでない」場合は考慮に入れずに、ひたすら事柄が多く成り立つことを表す文になる。165)も「魔薬に不純物が混じっていて、常習者百人に一人の割合で中毒死、そのまた十人に一人の割合で 飛屍化する」ことが多いとの意味であるが、その基底には「そうでない」場合も想定されていると思われる。それに対し、165)′は「そうでない」場合は考慮に入れずに表現するため、確率を表す文にはあまりふさわしくないかもしれない。これは「よく」が話者の記憶に頼っていて、これまで事柄が成立した場合のみを根拠に発話をする語であるため、成立した事柄が累積して、ある地点を超えた場合に「よく」という語を用いることになる。つまり、成立した事柄がゼロから最大値があるとすると、その中の平均点を超え、最大値に近いある地点を超えた場合に「よく」が用いられるのである。その際、ある地点という基準値を超えたという話者の判断が表れる。そのため「よく」は単なる回数の多さを超え、ある状態になりやすい傾向を表すことにもなる。用例から考えると、166)の「私」は「母上を頻繁に泣かせたり淋しがらせたりした」ことが幾度かある人間であり、166)′の「私」は「母上を泣かせたり淋しがらせたりし」やすい傾向の人間である。また、167)は「かれらがその付近で立ち往生したことが多くある」という意味であり、167)′は「かれらがその付近で立ち往生しないことがあまりない」という意味合いを持つ。

このように、「よく」と「しばしば」は二語とも高頻度を表す語ではあるが、「しばしば」が実際に起こったことに頼り、事柄を事実に即して捉える語であるのに対し、「よく」は話者の記憶に頼り、事柄が成り立つ場合のみを捉え、事柄が累積して最大値に近い基準値まで達していることを表す語である。ここでは事柄が累積し基準値を超えているという話者の判断を頻度表示の「よく」の〈評価性〉と考える。そしてそれはヒトやモノの傾向を表すことにもなる。

なお、本章の3.1で確認した、「しばしば」が会話文より地の文に現れる割合が圧倒的に多い理由も、頻度表示の「よく」の〈評価性〉と深く関連付けられているからであると判断される。典型的な頻度副詞として前例に即して発話する「しばしば」は、話者の判断を表す「よく」に比べ、会話文より地の文の方に多く用いられるのである。

4.4　まとめ

本章では、頻度を表す「よく」の特徴を、「しばしば」との比較を通して検討を試みた。その結果まず、頻度というのは、回数の多少（高低）をもち、「よく」と「しばしば」は多（高）となる。その点で「よく」と「しばしば」は同様の意味の構成要素をもつと言え、置き換えが可能なのである。ただし、「しばしば」には、時間枠があり、「よく」は時間枠が必須ではない。そのかわりに、事柄が累積し、これは〈評価性〉をもつ。そして事柄の累積のゆえに「よく」は習慣になる可能性を持つ。つまり、頻度表示の「よく」は、「しばしば」にはない反復動作が累積するという特徴をもっていて、反復継続の動詞述語とそれの累積把握との組み合わせが〈評価性〉を有し、頻度表示の「よく」の意味特徴である〈頻度性〉を構成するのである。

以上の検討から、先行研究の中で疑問にしていた森田(1980)の動作性というのは、時間軸に即した枠組みであり、状態性というのは時間軸から解放された記憶の蓄積であることが明確になった。また、近藤(1986)の言う用法のずれというのは、異なる用法へと移ってしまったというよりは、時間枠から解放された事柄の累積が発展性を持っていることであることが明らかになった。

第7章　副詞「よく」の意味構造

1.　本章の目的

本章では今までの考察に基づき、「よく」の意味の構成要素が各用法の中でどのように構成されて、どのようなプロセスを経て多義を生むのかについて考える。

2.「よく」の〈評価性〉

第1章の1で、 國廣(1982)の記述を引用したが、ここにもう一度挙げる。

> 「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。

「よく」が多義語であるなら、「意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている」はずであろうとの予測から、これまで考察を行ってきた。いままでの考察からわかる何らかの関連というのは、少しずつ異なる様子を示してはいるものの、すべての用法に共通にみられる〈評価性〉である。そしてこれまでの考察から、「よく」の〈評価性〉は動詞文あるいは動詞述語とそれが表す事柄の特徴、そしてそれに対する話者の捉え方によって現れる意味の構成要素であることが明らかになった。その〈評価性〉に関してより詳しく考えたい。

2.1　評価表示の「よく」の〈評価性〉

「よく」の基本的な意味を評価と考えると、その意味を最もよく表すのは、当然評価表示の「よく」であろう。第 3 章で確認したように、 評価表示の「よく」は頻度、程度、情態を表す「よく」が命題の内側で働き述語を修飾することと異なって、命題の外側で働き、命題全体に影響を与えるモーダルな文副詞として機能する。そして「よく」にかかる文は、ヒトの行動やモノの状態、自然現象など様々なことにまたがり、評価すべき対象であるだけに、次の用例のように、発話時以前、既に実現された事態を表すものであるか(168)、または発話時において継続している事態(169)の描写に用いられる。また、170)のように、ル形で現れる用例もあるが、形態としてはル形であっても事態は発話以前、すでに成され継続していることを指している。

168)　よく貯金を全部ゆっこに任せていたわね。(江波戸哲夫(2002)『部長漂流』)

169)　よく研究してるんだな。この能力のことを、おれよりもよく研究してるのかもしれないぞ。(筒井康隆(2002)『七瀬ふたたび』)

170)　よく正座できるわね！私なら、足、しびれちゃう。(赤川次郎(2005)『恋占い』)

すなわち、事柄自体はすでに完了したことに対する話者の直接的な評価を表すものである。そして具体的な文意としては、第3章からも分かるように賞讃、歓迎、感心、非難の意味を表すが、いずれも内部的に予測していた事態が実現したことに対する話し手の(通常肯定的[16])評価を表すという同じ構造をもっていた。すなわち、予測した事態が実現した時の話し手の肯定的評価を表すのが、評価表示の「よく」の特徴である。このように、評価表示の「よく」の〈評価性〉が命題全体にかけて働く肯定的評価であり、「よく」の意味の構成要素であることを取り立てて、ここからは「よく」の表す〈評価性〉を、それが発動するという意味で〈評価：→〉と表記する。 要するに「よく」の基本的な意味を評価と考え、それを最も明らかに表している評価表示の「よく」を考察した結果、「よく」の〈評価：→〉とは、動詞文を対象として、話者の予測を基準に、期待される事態の実現であるかそうでないかの判断であり、「よく」は期待される事態の実現である場合に対する話者の肯定的評価を表すものであるといえる。

2.2　情態表示の「よく」の〈評価性〉

第4章から考察したように、情態表示の用法は、特定の述語の意味や形式との組み合わせによって充実性、確実性、十分性といった具体的な意味を表していることが確認された。ただし、これまで情態表示のものと程度表示のものとが共存していたのは、やはり情態表示とは言っても、ゼロの状態から充実・確実・十分な状態へという状態の変化を表すことができ、それを程度的に捉えられるからであると思われる。情態表示の用法を「よく」の意味の構成要素である〈評価：→〉の観点から考えるために、用例をもう一度挙げる。

171)　大通りのよく整備された道、街路樹、歩道、西洋風建築の家、土蔵造りの商家、軍隊施設、各種の学校、各所の河岸市場などなど、篤にはすべて興味深いものであった。(松定ちよし(2001)『桃の木のトリック』)

172)　この記録をもう一度よく見てください。(御堂地章(2005)『日本崩壊』)

173)　貴美子が言っていることは、僕にもよく理解できた。(井上夢人外(2005)『クラインの壺』)

[16]　場面の処理によって否定的評価になる場合もあるが、場面に依存したもの(語用論)であると判断し、本稿では触れない。

171)の「よく整備された」、172)の「よく見る」、173)の「よく理解できた」は、話し手と聞き手(あるいは著者(語り手)と読者)が現象や状況といった同じ情報(対象)を共有しているように思われる。171)の整備されている状態、172)の見る対象、173)の理解する内容といった、お互い共有し合っている情報を基準に話し手の評価を表しているのである。ただし、評価表示の「よく」が命題全体にかけて〈評価：→〉が発動するのに対し、情態表示の「よく」は動詞述語にかかって、状態の変化が完全な段階に近いという話者の判断を表すものである。171)の話者は整備されたありさまが完全な状態に近いことを表しており、172)の話者は見る情報を完全な状態に到達するまでちゃんと見てくれることを促している。また 173)は相手が言っている情報が満足できる状態まで理解できたという意味合いを持つ。すなわち、情態を表す「よく」に示される評価には度合いがあり、ゼロから最大値の間、特に最大値に近いある基準値に到達しているとの判断が現れる。要するに、情態表示の「よく」の〈評価性〉というのは、話し手と聞き手の共有した情報を基準に、状態変化の述語とそれに対する程度的な捉え方によって、〈評価：→〉が発動するのである。

2.3　程度表示の「よく」の〈評価性〉

第 5 章で確認したように、程度表示の「よく」は状態変化の結果相と結果継続の状態を表す言語表現とかかわって、その程度の高さを表すものである。また、典型的な程度副詞と入れ替えても全く違和感のないものであって、本稿ではこの類型のみを程度表示の「よく」と規定した。それでは程度表示の「よく」に表される〈評価性〉はどのようなものであろうか。もう一度用例を挙げる。

174)　彼は手の甲までよく日焼けしていた。(宮部みゆき(2003)『誰か』)

175)　カーテンの隙間から外を眺めやると、どんよりと灰色の曇り空が続く英国には珍しく、気持ちのいいほどによく晴れた朝だった。(かわい有美子(2001)『水に映った月』)

176)　ふたりは双子のようによく似ていたが、少女か少年かは真理には判別できなかった。(吉永達彦(2001)『古川』)

程度表示の「よく」に表される〈評価性〉というのは、情態表示の「よく」と同じように、174)の日焼けしている対象、175)の晴れている朝、176)の似ている対象のような、話し手と聞き手(あるいは著者と読者)が共有し合っている現象や状況といった基準が存在し、その基準に照らして表れている継続状態の度合いが、ゼロから最大値の間の最大値に近い地点、すなわち、話者が満足できるくらいまで至っているかそうでないかの判断を表すものであって、

「よく」はその基準値に至っているという話者の判断を表す語である。要するに程度表示の「よく」は話し手と聞き手が共有した情報を基準に、状態変化の結果相と結果継続の状態の述語を対象として、その程度が最大値に近接したことに対して、〈評価：→〉が発動するのである。

2.4　頻度表示の「よく」の〈評価性〉

第6章でみてきたように、頻度表示の「よく」は、述語の特徴からすると、通常の高頻度を表す副詞と同じように、動作動詞、状態動詞と組み合わさる場合、事柄が高頻度で繰り返されていることを表すことがわかる。特に動作動詞と組み合わされる場合、事柄の反復性と関係しているため、アスペクト特に習慣的継続状態と深く関係していた。ところが、事柄の反復を表す際、話者がその頻繁さすなわち、回数の多さには特に注目せず、傾向あるいは習慣などを表現する語であるため、単なる反復ではなく、事柄が累積していることを表す。

そして、「よく」が「ある、いる」という存在を表す動詞と組み合わされる場合、存在を表す動詞はアスペクトから解放されているため、時間的尺度と深く関係している頻度という概念が時間の進行とは関係なくなり、事柄の累積だけが残ってしまう。その結果、意味的にはごく一般的な全く珍しくない事柄を表す意味合いを持つ。

事柄の累積というのは同じ動作の反復であるため、動作性動詞と組み合わされる場合、習慣的行為になる可能性を潜在的に持つようになり、人間の習性や特徴の描写に用いられやすい。

頻度表示の用例の中には、頻度が多くなることに連動して、動作の量的変化がみられるタイプのものがあり、それらは、一定の時間の中でゼロから最大値という回数的変化のあるタイプの述語をとり、全体として状態変化を表すことになると説明できる。頻度表示の典型と少し異なって見えるが、事柄が累積することにより、状態が変化するという観点からするとそれほど異なるものではない。

このように、頻度表示の「よく」は事柄の累積という特徴を示している。しかし、頻度表示の〈よく〉の話者は話者自身の記憶に依存して発話をするため、事柄の累積というのは、事態の繰り返しによって話者が形成したイメージであり、それは発話の基準となる。用例から考えてみる。

177)　母さんと<u>よく</u>キャッチボールしたよね。（日下圭介(2001)『自選ショート・ミステリー』）

177)の「キャッチボールした」ことは話者の記憶の中にある事柄が繰り返されたイメージを基準に、何回か反復され累積していることを表し、「よく」はそれによる累積の度合いを想定するのである。そして事柄の累積は習慣的継続状態とかかわっているといえるが、それは結局恒常性と相接しているのである。言い換えると、習慣的継続状態の最大値は恒常性であって、頻度表示の「よく」はゼロ値から最大値(恒常性)という尺度を有し、「よく」が働くことにより最大値に近いという話者の判断が出てくるのである。要するに、頻度表示の「よく」は、話者の記憶を基準に、反復継続の述語とその述語に対する累積把握によって、〈評価：→〉が発動するのである。

3.「よく」の意味構造

以上、評価、情態、程度、頻度表示の「よく」の事柄の特徴と「よく」の意味の構成要素である〈評価性〉について考察を行った。各々の用法に表れている〈評価：→〉をここにもう一度まとめる。

・評価表示：動詞文を対象として、話者の予測を基準に、期待される事態の実現であるという通常肯定的評価
・情態表示：話し手と聞き手とが共有した情報を基準に、状態変化の動詞述語を対象として、状態の変化が基準値に到達したという話者の判断
・程度表示：話し手と聞き手が共有した情報を基準に、状態変化の結果相と結果継続状態の動詞述語を対象として、その度合いが最大値に近いという話者の判断
・頻度表示：話者の記憶を基準に、反復継続の動詞述語を対象として、習慣的継続状態が最大値に近いという話者の判断

「よく」の意味の構成要素を〈評価性〉と考え、評価表示の「よく」に関する考察により明らかになった〈評価：→〉は、情態・程度・頻度表示においても同じようなモデルを組み立てていた。それは発話基準が存在し、動詞文あるいは動詞述語の特徴とそれに対する話者の捉え方による判断を表すものである。ただし、発話の基準は用法によって少し異なってみえる。まず、評価表示の発話基準である話者の予測は第3章で述べたように、－予測、0予測、＋予測といった三つのケースがあり得る。ところがそれは言い換えると、ある事態に対して誰もが想定可能なすべてのケースを意味する。すなわち、評価表示の話者の予測という基準は、誰もが見ても納得できるくらいのものであることを意味する。それに対し、情態と程度表示の「よく」の発話基準は話し手と聞き手(あるいは著者と読者)が共有している情報

であって、評価表示の発話基準に比べ共有度が下がるといえる。目にしている、あるいは耳にしている現象や情報などを発話基準として共有しているのは話し手と聞き手であるため、評価表示の発話基準の持つ普遍的な特徴は見られない。さらに共有度が下がるという特徴は、頻度表示になるともっと明確になる。頻度表示の「よく」の発話基準は話者の記憶の中のものであるため、話者本人にしか知り得ないものであり、評価表示、情態表示、程度表示のそれと比較しても話し手と聞き手間の共有度が最も低いといえる。一つ例を挙げ確認してみよう。

178)「…昔は、よくこうやって、手、繋いだよね？」
「そ、そうだっけ？」
「そうだよ。忘れちゃったの？漠がまだ学校に行ってた小学校のころは、行きも帰りも手を繋いで帰ったでしょ？クラスの皆からは『夫婦』とかって、くだらないこと言われてからかわれたけど、いっつもこうやって指を絡めていっしょにいたよね。」（ゆうきりん(2002)『オーパーツ・ラブ SP』）

178)の用例は頻度表示のものであるが、ここでの頻度は事態の繰り返しによって、話し手が形成したイメージである。聞き手と共有した情報を基準とするのではなく、話し手独自の判断による発話をしているため、聞き手は「そうだっけ？」と同意できないのである。頻度表示の「よく」は頻度そのものを問題とするのではなく、事柄の累積を表すものであると先述したが、この累積というのは、時間の中で体験したことを話し手の心の中につくっておいたもので、話し手は本人の中に形成されたイメージをもとに発話をする。そのため、頻度表示の用例は、次の 179)のように、話者自身のことに関して言う例が非常に多い。また、180)のように、ヒトやコトに関する話者のイメージをもとにその傾向や特徴を描写する例も多い。

179)　僕は若い頃よく行った高台の公園に立ち寄ることにした。（山本智恵子(2004)『境界線上の人々』）
180)　君はいい加減な男だ。携帯をよく失くす。（矢作俊彦(2004)『ロング・グッドバイ』）

したがって、頻度表示の「よく」の〈評価：→〉というのは、聞き手と共有していない話し手独自の基準を有し、それは他の用法に比べ話し手と聞き手間の情報の共有度が低いとい

える。評価をするためには基準とする情報が必要であるが、その情報の共有度が評価表示から情態、程度、頻度表示の用法に行くにつれ低くなり、それは「よく」がスコープとしてとる部分が狭くなる現象と合致する。すなわち、評価表示の「よく」は文全体をスコープとし、情態・程度表示の「よく」は動詞句あるいは動詞を修飾する。また頻度表示の「よく」は動詞をスコープととる。評価、情態・程度、頻度表示の用法にいくにつれて「よく」が修飾する部分は小さくなり、話し手が聞き手と共有する発話基準の共有度は下がるのである。

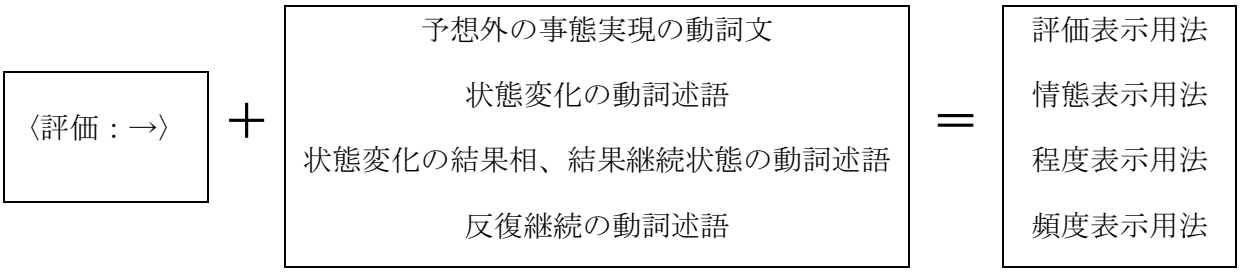
次に、「よく」の表す〈評価：→〉は、用法によってかかる対象と評価が異なっている。評価表示に表れる〈評価：→〉には、文副詞として命題全体に対する話者の肯定的評価が直接表れるのに対し、情態・程度・頻度表示の「よく」の〈評価：→〉は述語動詞にかかるもので、それぞれ状態変化、継続状態、反復継続の述語を対象として、直接肯定的評価をするのではなく、ゼロ値から最大値までの尺度をもち、その度合いが最大値に近いという話者の判断を表すものである。

4. まとめ

評価、情態、程度、頻度表示のそれぞれの「よく」の特徴をまとめると、次のように表せる。

〈評価：予想外の事態の実現、方法：肯定的〉
〈情態：状態の変化、方法：程度的捉え方〉
〈程度：高、方法：最大値に近接〉
〈頻度：多、方法：累積把握〉

この「よく」の意味特徴が〈評価：→〉をもち、次のような文法的機能によって、〈評価：→〉が分岐し、意味が変わるのである。



［図 4］「よく」の意味構造

これらの分析結果により、「よく」の意味の構成要素である〈評価：→〉について明らかになり、〈評価：→〉が文法的機能によって、お互いに異なって見える副詞的な意味を発生することが確認された。

「よく」という語の四つの用法は、全く関係のないもののように見えるが、実は「よく」自体の意味の構成要素は基本的に同じであると思われる。それにもかかわらず、多義的に見えるのは「よく」のもつ意味の構成要素である〈評価：→〉が、組み合わせる対象との関係、つまり動詞文か動詞述語か、さらにどのような特徴の動詞述語かによって、全体的に形成される意味が違うからである。文の中で働く位置によってスコープが変わり、そのスコープの相違から出てくる尺度が、それぞれ異なる意味に見えるように発揮されるのである。修飾する対象が変わると意味も変わっているように見えるが、実は同じようなモデルで書かれるものが、対象によって変わってくるのである。すなわち、〈評価：→〉という「よく」の語彙的な意味が文法的に運用されることで多義的に見えるのであって、「よく」という語は、多くの意味をもつ多義語ではなく、〈評価：→〉という一つの意味の構成要素が文法的機能によって多義化したものである。

5.　本論文の成果と今後の課題

本研究は副詞「よく」の多義性を解明するもので、多義に関する各論に入る前に、まず「よく」に関する従来の通常の用法分類を再考し、評価表示、程度表示、頻度表示の用法以外に情態表示の用法があることを指摘した。先行研究では取り上げられていない情態表示の「よく」を認めることができたが、興味深いことにこの四つの用法は通常の副詞分類に当てはめられる。

副詞
- 情態副詞－情態表示
- 程度副詞－程度表示、(頻度表示)
- 文副詞－評価表示

頻度表示の用法を程度副詞の一種と考えると、「よく」の用法は、以上のように通常の副詞分類と一致する。ただし、ありさまと程度、程度と評価というふうに両方を表していて境界があいまいなものも存在する。現代日本語の中に多義の副詞はいくつか存在するが、「よく」のようにその用法が副詞の分類と一致するものは非常に珍しいと思われる。

また、「よく」の多様な意味同士が持っているはずである意味的関連というのは、各用法

の構文的、意味的考察を通し〈評価：→〉であることが確認され、それが動詞文または動詞述語の文法的機能によって分岐し、「よく」の多義性が現れることを述べた。日本語の中には多義語が相当多く、その中でも副詞は具体的な指示物をもつものではないため、その意味を把握することが容易ではない。しかし、それが明らかに同音異義語ではないと判断されれば、各用法ごとの構文的、意味的考察を行うことによって、意味の構成要素を明らかにすることが可能である。また、意味の構成要素は各用法の文法的特徴と組み合わせることで多義の現象を説明することが可能になる。現代日本語の多義の副詞「よく」や「どうも」、「ちょっと」などは、いずれも日常生活の中で頻繁に使われる語である。場面や文脈を指定して伝達できる効率的な特性のためであると考えられるが、日本語社会の暗黙の了解事項に基づいて運用されるため、日本語学習者にとっては非常に難解な語である。ところが、意味の構成要素を探り、それらと各用法の特徴との関係を明らかにする過程の中で、多義の構造が見えてくる展望を得た。

本研究は、各論の中で必要によって類義関係にある副詞を取り上げ比較研究を試みたものの、全体的には「よく」という一語に焦点が置かれていた。そのため、「よく」という多義の副詞に関する本格的な研究になったとは思われるが、他の副詞とどのように関係づけられるものか、また、副詞体系の中でどう位置づけされるべきものなのかなどに関して触れることができなかった。今後は、「よく」が副詞体系の中で、他の副詞とどのように関係づけられて存在しているかについて試みたい。

〈参考文献〉

＊点線は本文の引用文献

新川忠(1996)「副詞の意味と機能－結果副詞をめぐって－」『ことばの科学７』むぎ書房 pp. 61-80

飯豊毅一(1973)「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座形容詞形容動詞』鈴木一彦・林巨樹編　明治書院　pp. 164-207

井上博嗣(2007)「古代語の副詞「よく」の「十分に」とされる意味用法について」『女子大國文』141 京都女子大学国文学会　pp. 74-91

大野晋他(1981)『角川類語新辞典』角川書店

岡本佐智子・斎藤シゲミ(2004)「日本語副詞「ちょっと」における多義性と機能」『北海道文教大学論集』5　pp. 65-76

加藤克美(1991)「談話における評価副詞について」『研究論集』54　関西外国語大学編 pp. 43-55

金田一春彦他(2007)『三省堂国語辞典第 6 版』三省堂

工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』渡辺実編、明治書院　pp. 176-198

工藤真由美(1998)「否定と呼応する副詞をめぐって - 実態調査から - 」『大阪大学文学部紀要』39　pp. 69-107

國廣哲彌(1982)『意味論の方法』大修館書店

_____(1986)「語義研究の問題点－多義語を中心として－」『日本語学』5-9 明治書院 pp. 4-12

_____(1997)『理想の国語辞典』大修館書店

久米稔(1968)「「頻度に関する副詞」の意味の測定に関する試み」『フィロソフィア』第 54 号　早稲田大学哲学会　pp. 107-122

グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

小池康(2002)「現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷」『文藝言語研究』42 文藝編　筑波大学文芸・言語学系　pp13-36

国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版

国立国語研究所編(1991)『副詞の意味と用法』日本語教育指導参考書 19

_____編(2004)『分類語彙表増補改訂版』国立国語研究所

児玉望(2008)「日本語副詞の構造的多義」『熊本大学言語学論集』7　pp. 41-60

近藤仁美(1986)「多義の副詞「よく」についての考察」『国語学研究』26　pp. 100-89

近藤泰弘(1997)「否定と呼応する副詞について」『日本語文法体系と方法』14　ひつじ書房 pp. 89-99

坂口昌子(1999)「否定形式との関係からみた程度副詞の体系」『国語語彙史の研究』18 国語語彙史研究会編　和泉書院　pp. 1-19

杉村泰(2000)「モダリティ副詞「マサカ」再考」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』7 pp. 11-29

鈴木敏昭(1994)「多義語の構造 －サス、オチル、ヒクの場合」『富山大学人文学部紀要』20　pp.　23-43

_____(1997)「多義語におけるメタファの働きについて」『富山大学人文学部紀要』27 pp. 1-18

_____(1999)「多義語における類似性と差異性」『富山大学人文学部紀要』31　pp. 45-69

たかきかずひこ(2006)「「意味の説明」をめぐって」『ことばの科学』11 言語学研究会編 pp. 63-87

谷部弘子(1986)「話し手の評価を担う形容詞」『日本語学』5-11　明治書院　pp. 64-75

田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』1-61 pp. 25-36

丹保健一(1986)「多義語の語義特徴についての小見－副詞を例として－」『文芸研究』111 日本文芸研究会　pp. 47－54

_____(1991)「多義語における中心的語義と周辺的語義－「かける」の場合－」『文芸研究』126 日本文芸研究会　pp62-70

田忠魁・泉原省二・金相順編(1998)『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』研究社

中右実(1980)「文副詞の比較」『日英語比較講座第2巻文法』國廣哲彌編　大修館書店 pp. 159-219

中村明(2010)『日本語語感の辞典』岩波書店

鳴海伸一(2012)「程度的意味・評価的意味の発生:漢語「随分」の受容と変容を例として」『日本語の研究』8(1) 日本語学会　pp. 60-45

西尾寅弥(1972)『国立国語研究所報告 44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

_____(1998)「ことばの意味に伴う評価性」『国語と国文学』75(6)　至文堂 pp. 1-18

仁田義雄(1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10 明治書院 pp. 18-29

_____(1983)「結果の副詞とその周辺－語彙論的統語論の姿勢から－」『副用語の研究』渡辺実編　明治書店　pp. 117-136

_____編(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
日本国語大辞典第二版編集委員会編(2002)『日本国語大辞典第二版』13　小学館
萩原孝恵(2004)「「よく」の用法調査とその分析 ：〈頻度〉と〈程度〉を中心に」『昭和女子大学日本文学紀要』15　pp. 21-30
_____(2005)「副詞「よく」の意味を探る ： 誤用文をもとにしたアンケート結果からの考察」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』16　pp. 1-12
_____(2006)「母語話者と非母語話者間のオンラインの意味構築 ： 「よく」が使用された会話分析からの考察」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1　pp. 17-30
原田登美(1982)「否定との関係による副詞の四分類－情態副詞・程度副詞の種々相－」『国語学』128　国語学会　pp. 138-122
樋口文彦(1989)「評価的な文」『ことばの科学』3　pp. 181-192
_____(2001)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10　pp. 43-66
久野雅樹(1993)「多義語研究の動向と課題」『東京大学教育部紀要』33　pp. 107-115
飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
藤原浩史(2005)「副詞「ちょっと」の意味構造」『国分目白』44　日本女子大学　pp. 68-78
_____(2011)「真の情報を導く副詞の形成」『中央大学人文科学研究所研究叢書54　文法記述の諸相』中央大学出版部　pp. 41-64
三好準之助(2008)「語彙の対照研究のための多義構造の記述モデル」『京都産業大学論集人文科学系列』38　pp. 1-33
_____(2009)「多義構造の分析モデルの修正と応用」『京都産業大学論集人文科学系列』40　pp. 223-240
籾山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」『認知言語学論考』1　ひつじ書房　pp. 29-58
森田良行(1980)『基礎日本語(2)意味と使い方』角川書店
_____(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
_____(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版
森本順子(1992)「副詞的機能とモダリティ-「よく」について-」『京都教育大学紀要』80　pp71-79
_____(1994)『話し手の主観を表す副詞について』日本語研究叢書7　くろしお出版
八尾由子(2009)「日本語の副詞シバシバ・タビタビとタマニ・マレニ」『文化共生学研究』8　岡山大学大学院社会文化科学研究科　pp. 41－53

八亀裕美(2003)「形容詞の評価的意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15　pp.13-40
ロザリンド・ソーントン(1983)「形容詞の連用形のいわゆる副詞的用法」『日本語学』2-10 明治書院　pp.64-76
渡辺実編(1983)『副用語の研究』明治書院
_____(1983)「副用言総論」『日本語学』10-2 明治書院　pp.4-9
_____(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23　pp.1-16
_____(2001)『さすが日本語』ちくま新書
李佳娟(2012a)「副詞「よく」の頻度表示の意味論的考察－「しばしば」との比較から－」『中央大学大学院研究年報』41　文学研究科編　pp.1-13 本文第 6 章の初出論文
_____(2012b)「副詞「よく」の程度表示の意味論的考察」『日本言語文化』23　pp.329-349　韓国日本言語文化学会 本文第 4、5 章の初出論文
_____(2013)「副詞「よく」の評価表示の意味論的考察」『日語日文学研究』87　pp.173-196　韓国日語日文学会 本文第 3 章の初出論文
_____(2015)「副詞「よく」の意味構造」『日本言語文化』30　pp.129-146　本文第7章の初出論文

〈資料〉

『現代日本語書き言葉均衡コーパス・少納言』（BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese） http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/
『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』（BCCWJ:Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese） https://chunagon.ninjal.ac.jp/
各用例の出典については、個々の用例に付した。

あとがき

不可能であろうと思ったことを
可能にしてくださった愛する神様に感謝いたします。
また、いつも優しく指導してくださった藤原先生、
大変お世話になりました。本当にありがとうございました。
最後に、私の支えである両親と兄また愛する夫と娘チェユンに
感謝の言葉を伝えます。